

Global Classrooms

グローバル・クラスルーム

報告書

高校模擬国連国際大会への第7回日本代表団派遣支援事業



2013年 6月



グローバル・クラスルーム日本委員会

Japan Committee for Global Classrooms



公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

Global Classrooms

【後援】

外務省
 経済産業省
 文部科学省
 公益財団法人日本国際連合協会
 国際連合広報センター

【協賛】

メリルリンチ日本証券株式会社

Bank of America
Merrill Lynch

TOEFL Junior (GC&T)

ETS TOEFL Junior

株式会社新日本科学

SNBL

トヨタ自動車株式会社

TOYOTA

株式会社ニチレイ

三井物産株式会社

三井物産

みずほコーポレート銀行

MIZUHO

学校法人河合塾

河合塾

三井住友銀行

三井住友銀行
 SMBC

キッコーマン株式会社

kikkoman

株式会社公文教育研究会

KUMON

三菱商事株式会社

三菱商事株式会社

株式会社 JTB

感動のそばに、いつも。 **JTB**

一般財団法人凸版印刷三幸会

TOPPAN

株式会社講談社

講談社
 KODANSHA

株式会社ナガセ 東進ハイスクール

東進ハイスクール

学校法人駿河台学園駿台予備学校

駿台予備学校

三菱東京 UFJ 銀行

三菱東京UFJ銀行
 MUFG

株式会社エヌエフ回路設計ブロック

NF
 株式会社 エヌエフ回路設計ブロック

伊藤忠商事

ITOCHU 伊藤忠商事

Global Classrooms

学校法人高宮学園代々木ゼミナール



三井住友海上火災保険株式会社



損保ジャパンちきゅうくらぶ



丸紅株式会社



日本光電工業株式会社



吉田製薬株式会社

株式会社ローソン



イオン株式会社



【協力】

日本航空株式会社



読売新聞



日本経済新聞社

株式会社リクルート



理想科学工業株式会社



(順不同)

Global Classrooms

目次

目次	- 1 -
はじめに	- 1 -
グローバル・クラスルーム	- 2 -
日本模擬国連	- 2 -
企画概要	- 3 -
派遣報告	- 4 -
参加者報告（アドバイザー）	- 9 -
参加者報告（派遣生）	- 13 -
支援協力団体一覧	- 33 -
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター （ACCU）より	- 34 -
会計報告	- 35 -
グローバル・クラスルーム日本委員会（2013年6 月現在）	- 36 -
おわりに	- 37 -
参考	- 38 -
MEMO	- 39 -

はじめに

この度、高校模擬国連国際大会への7回目の日本代表団派遣支援事業の報告書を皆様にお届けできる運びとなりました。本事業にご共催いただいた公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターをはじめ、ご支援いただいた関係省庁・団体、ご協賛、ご協力いただいた企業・法人等、多くの皆様からの温かいご支援・ご高配を賜りました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本事業は2012年11月10日-11日に東京の国連大学で行われた第6回全日本高校模擬国連大会において優秀な成績を収めた6校12名の高校生を、日本代表団として国際大会に派遣いたしました。今回、日本代表団はクロアチア共和国大使として世界23箇国、総勢約2500名の参加者を前に今大会においても見事な存在感を発揮していました。

本報告書で大部分を占めているのは日本代表団12名の高校生の報告です。12名の高校生がアメリカ・ニューヨークでそれぞれが担当する会議の議場において感じたことが全て記されています。会議前、会議中、そして、これからの将来に向けて各人の様々な思いが読み取れる内容です。その思いが今後のそれぞれの活動に少しでも刺激を与えるものとなるのであれば、私どもとしてこれ以上の喜びはありません。

最後に、本書が多くのの人に読まれ、日本における高校模擬国連活動の更なる普及と発展の一助になること、そして、これから国際舞台に関わろうとする多くの人の活力につながることを期待しております。今後とも、グローバル・クラスルーム日本委員会へのご支援・ご指導をよろしくお願いいたします。

グローバル・クラスルーム日本委員会
2013年度 理事長 柴原 一貴



Global Classrooms

グローバル・クラスルーム

グローバル・クラスルームは、国連会議のシミュレーション(模擬国連)を通じて、現代の世界におけるさまざまな課題について学ぶための先進的な教育プログラムとして、公立中学校・高校を対象に、米国国連協会の提唱により始まりました。模擬国連に参加する学生は、国連加盟国の大使として、国際問題を討議し、決議案を作成し、賛成者・反対者と交渉し、国連の手續規則を駆使して、世界が直面する課題の解決に向けて、「国際協力」を実現していきます。

米国情連協会は、このグローバル・クラスルームを米国諸都市のみならず世界各地に普及させることで、国際理解教育と模擬国連の良さを多くの国の学校と共有するとともに、模擬国連コミュニティの裾野を広げようとしています。

グローバル・クラスルームは、既に中国、インド、ドイツ、レバノン等で始まっています。日本でも、大学生の模擬国連は30年以上の歴史があり、毎年全日本模擬国連大会が開催されています。そして2007年、かねてより若年層に対して国際問題を討議する際に欠かすことができない経済や国際金融の知識の普及活動をグローバルに行ってきたメリルリンチ社をスポンサーに迎えグローバル・クラスルーム日本委員会が組織され、同年の第1回日本代表団の国際大会への派遣を皮切りに高校生の模擬国連活動が始まりました。

日本模擬国連

日本模擬国連(Japan Model United Nations: JMUN)は、日本で初めて組織化された模擬国連活動を行う団体です。1983年上智大学において、当時上智大学教授であった緒方貞子(元国連難民高等弁務官)顧問の下、発足した「模擬国連実行委員会」を前身としています。当初は毎年ニューヨークで開催されている「模擬国連会議全米大会」への日本代表団の派遣を中心に活動を行っていましたが、委員会の規模の拡大に伴い、日本国内における模擬国連の活動を本格化させ、2010年、名称を現在の「日本模擬国連」に改名しました。

日本模擬国連の目的は、「模擬国連」という活動を通じて、さまざまな国際問題についての理解を深めると共に、それらの問題の解決策を探り、国際社会に貢献できる人材を育成・輩出することです。また、国際政治や国際問題を体験的に学習する効果的な方法として「模擬国連」を日本において普及させる役割も担っています。

Global Classrooms

企画概要

【企画名称】

高校模擬国連国際大会への第7回派遣支援事業

【主催】

グローバル・クラスルーム日本委員会

【共催団体】

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

【期日】

2013年5月14日(火)～20日(月)

【開催場所】

米国ニューヨーク市

【内容】

5月中旬に米国国連協会の主催により開催される高校模擬国連国際大会（14th Annual Global Classrooms International High School Model UN Conference）に、グローバル・クラスルーム日本委員会主催の第6回全日本高校模擬国連大会（Global Classrooms in Japan 2012）にて選出された高校生が日本代表団として参加することへの支援。同大会には米国国内を含む世界23箇国から総勢約2500名の高校生が参加しました。



1) 日本代表団 (12名)

開成高等学校

馬欠場 直人、渡邊 克也

実践女子学園高等学校

小長谷 理枝、村田 有彩

渋谷教育学園幕張高等学校

有元 万結、森川 佳奈

桐蔭学園中等教育学校

小泉 喜之介、増渕 翔

灘高等学校

高島 峻輔、吉井 一希

西大和学園高等学校

佐藤 和宏、西田 裕信

2) 引率者 (6名)

開成高等学校

山崎 欣也

実践女子学園高等学校

奥井 雅久

渋谷教育学園幕張高等学校

柴田 善忠

桐蔭学園中等教育学校

新井田 真樹

灘高等学校

中西 健介

西大和学園高等学校

丸谷 貴紀

3) グローバル・クラスルーム日本委員会 (3名)

東京大学教養学部教養学科

青柳 拓真

慶應義塾大学大学法学部

立花 裕太郎

東京大学教養学部

松野 雅人

4) 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (1名)

康 武司

Global Classrooms

派遣報告

【派遣日程】

- 4月21日(日) インフォメーション・セッション
- 5月14日(火) 成田空港出発
アメリカ合衆国ニューヨーク到着
現地校訪問
- 5月15日(水) 国連クロアチア共和国政府代表部訪問
国連平和維持活動局中満泉 中東・アジア部長 事務所訪問
国連日本政府代表部訪問
- 5月16日(木) 模擬国連開会式
- 5月17日(金) 模擬国連会議1日目
- 5月18日(土) 模擬国連会議2日目
- 5月19日(日) ニューヨーク出発
- 5月20日(月) 成田空港到着

【参加会議】

高校	担当会議	議題
開成高等学校	Commission on Crime Prevention and Criminal Justice	Emergence of New Synthetic Drugs
実践女子学園高等学校	World Trade Organization	Preventing and Combatting Illicit Trade
渋谷教育学園幕張高等学校	General Assembly Regional Committee Eastern Europe	MDG Review Conference
桐蔭学園中等教育学校	World Health Organization	Generic Drugs
灘高等学校	International Organization for Migration	International Migration and Development
西大和学園高等学校	General Assembly First Committee	Cyber Terrorism



Global Classrooms

4月21日

【インフォメーション・セッション】

派遣生は、本委員会評議員よる激励の言葉を受け、高校模擬国連活動の歴史や日本代表団の重みなどを感じ、少々緊張した面持ちでした。

外務省総合外交政策局国連企画調整課 水野光明 首席事務官に「国連の交渉現場について」という題のもとご講演頂きました。派遣生は、国連の現場についてのお話を伺えたことに興奮した様子でした。水野 首席事務官には引き続き、派遣生による研究発表会にご参加いただきました。



研究発表会では、派遣生が、国際大会にて提案する政策を英語でプレゼンテーションをしました。英語での発表や、それに対するフィードバックを通して、担当会議・議題の理解を深める良い機会となりました。

研究発表会終了後、昼食を挟み、増谷康様（講談社クーリエ・ジャポン編集部編集 アジア班デスク）に、「メディアは真実を伝えるか」というテーマのもと、ご講演いただきました。

最後に、国際大会に参加した際の戸惑いを少しでも少なくするために英語でのディスカッションを実施しました。派遣生は、英語をただ話すだけでなく、英語を使って考え、交渉することの難しさを痛感するとともに、残された準備期間で何が自分にできるのかを考える良い機会になりました。



Day 1

【日本出発・ニューヨーク到着】

成田国際空港からニューヨークのジョン・F・ケネディ国際空港へ向けて出発しました。

到着後、しばらくの自由時間の間、派遣生はマンハッタンのビル街を歩き、ニューヨークにきたことを実感していました。



【Buddy School】

高校模擬国連国際大会を主催する米国国連協会の紹介を通じ、Hillcrest High School とセントラルパークにて交流しました。英語を使う良い機会になっただけでなく、同年代の高校生に出会うことができ、非常に有意義なひとときを過ごしました。

Global Classrooms



Day 2

【国連クロアチア共和国政府代表部】

クロアチア政府代表部にて、次席大使及び秘書官によるセッションが執り行われ、事前に派遣生が作成した外交方針書 (Position and Policy Paper)へのフィードバックを頂きました。



実際のクロアチアの外務官からのアドバイスを通じ、派遣生の政策を洗練する良い機会となりました。

【国連平和維持活動局 中満泉 中東・アジア部長 事務所訪問】



本委員会評議員をしている、中満泉 中東・アジア部長の事務所を訪問しました。現在、中満様の担当している案件や模擬国連が人生に及ぼした影響などのお話を伺い、高校生にとってはまたとない機会となりました。

【国連日本政府代表部訪問】



午後は、国連日本政府代表部 梅本和義 次席大使及び中前隆博 公使を表敬訪問しました。

中前隆博 公使に、「国益とは何か?」といったテーマでのお話や、高校模擬国連国際大会への激励のお言葉をいただきました。

質疑応答の際、「国連改革に対する日本政府としての立場」や「ミレニアム開発目標達成に向けて国際社会及び日本がとるべき行動」をはじめ、多くの質問が派遣生より寄せられ、活発な議論が展開されていました。

Day 3

【高校模擬国連国際大会開会式】

各国から大勢の参加者が集っていることもあり、派遣生たちは少々緊張した面持ちでした。



クロアチア大使席、日本大使席、議長席前といった場所で写真撮影をしていました。

Global Classrooms

また、会場となった国連総会本会議場は、改装の関係で来年度からは使用出来なくなることもあり、例年以上に特別な開会式となりました。

日本代表团一同、翌日に迫った会議に向けて改めて気を引き締め直していました。

Day 4

【高校模擬国連国際大会 大会1日目】

滞在していたグランドハイアットにて模擬国連会議が行われました。

200人以上が集まる総会本会議や、少人数の地域部会など、参加する会議規模は様々でしたが、全ての派遣生が、自らの国益を達成すべく、懸命な交渉をしていました。



初日の会議終了後、派遣生たちは会議経過に落ち込むことなく、一日目の反省を踏まえ、翌日に向けた準備をしていました。

Day 5

【高校模擬国連国際大会 大会2日目】

初日と同様にグランドハイアットホテルにて会議が行われました。

初日と2日目の間で練り直した会議戦略をもとに、自らに有利な成果文書採択に向けて粘り強く交渉していました。



【高校模擬国連国際大会閉会式】

会議終了後すぐに、開会式と同様、国連総会本会議場にて閉会式が行われました。閉会式では、西大和学園高等学校ペア、灘高等学校ペアが優秀賞 (Honorable Mention) を獲得しました。



全ての派遣生は、大きな疲労の中、会議を無事に終えることが出来た達成感、充実感に満ちていました。

Global Classrooms

Day 6・7

【ニューヨーク出発】



長くも短くも感じた全日程を終え、ジョン・F・ケネディ国際空港を出発し日本に帰国しました。それぞれ悔しさや嬉しさを胸にしながら、何かをやり遂げたという達成感、充実感に満ち溢れていたのではないのでしょうか。

受賞

【Honorable Mention（優秀賞）】

灘高等学校

高島 峻輔、吉井 一希

西大和学園高等学校

佐藤 和宏、西田 裕信



立花 裕太郎

慶應義塾大学法学部政治学科2年
グローバル・クラスルーム日本委員会 理事長補佐

初めに、今回の派遣支援事業にご協賛・ご協賛及びご後援頂いた全ての諸団体の皆様並びにグローバル・クラスルーム日本委員会に関わって下さった、全ての皆様に御礼申し上げます。

今回の派遣支援事業には、本委員会理事長補佐の立花、研究の青柳、研究補佐の松野の三人がアドバイザーとして日本代表団に同行いたしました。派遣支援事業への思いを以下で述べ、私からの参加者報告とさせていただきます。

私は2年前に日本代表団の派遣生として高校模擬国連国際大会に参加しました。開会式を目前にして潘基文事務総長と日本代表団の一員として直接お会いする機会に恵まれました。今でも事務総長から「よりよき人類の将来のため、若い世代にはグローバルな視点を持ってほしい」という言葉を頂いたのを覚えています。会議結果に関して言えば、私は賞を受賞するには至りませんでした。他国の大使が自国の主張を一切譲ろうとしない強硬な姿勢の大使が多く議場に存在したこと等、日本の会議環境との違いに戸惑い、会議のパフォーマンスが全日本高校模擬国連大会の時に比べ著しく落ちました。当時は、後悔から受賞を逃した原因を周りに求めました。しかし、自国の政策を売り込み、一切の妥協を許さない彼らの会議行動こそが国益を守る大使としてあるべき姿なのではないかと考えるようになりました。今となっては会議を通じてグローバル・スタンダードや欧米の価値観を体験し、事務総長も仰っていたグローバルな視点が養われたことに参加した意義があったと考えています。

そして、同期の派遣生と1週間ともに過ごし培った友情は何事にも代えがたい私の財産となっています。それぞれの活動の分野は違えども、常にお互いを刺激しあう関係にあります。

私の場合、進路選択において、国際大会に派遣されたことに大きく影響されました。国際情勢に私と同じように興味関心を持っている、国内外の優秀な高校生たちと出会いが、大学ではより深く国際政治を学びたいと考えさせるきっかけとなりました。

グローバル・クラスルーム日本委員会に大学

参加者報告 (アドバイザー)

Global Classrooms

生として携わっていく中、二年前の派遣事業を振り返ると、後輩たちには私の時より多くのきっかけを与えたいという思いが芽生えました。

新たなきっかけの提供を実践した形の一つとして、今年度は派遣支援事業のコンテンツの拡大を行い、訪問先に国連クロアチア共和国政府代表部を加えました。派遣生の作成した外交方針書を事前に提出し、訪問の際、クロアチア共和国の次席大使、及び秘書官よりご意見を賜りました。予定されていたセッションの終了後には個人的に質問に行った派遣生も多くおり、与えられた機会を最大限に活用しようとする姿が見受けられました。

今回も日本代表団は素晴らしい会議行動を見せ、Honorable Mention（優秀賞）二つという優秀な成績を収めました。しかし、今年度の派遣支援事業が本当の意味で成功であったかはまだ誰にも分かりません。将来、様々な進学先や分野に進んだ時に、参加したことが自分を作る一つの転機と認識されて初めて、成功だったと言えるのだと思います。私としましては、将来、このように感じてもらえるように派遣支援に取り組んだつもりですし、派遣生一人ひとりの転機となると確信しております。

また、今後一人でも多くの高校生にこのきっかけを提供するためにも模擬国連活動の普及に邁進していく所存です。

最後に改めまして、本事業にご支援くださいましたすべての皆様に、厚く御礼を申し上げます。今後ともグローバル・クラスルーム日本委員会へ変わらぬご厚誼を賜りますようお願い申し上げます。

青柳 拓真

東京大学教養学部教養学科総合社会科学国際関係論3年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究担当

模擬国連とは、非常に欲張りな活動です。国際問題、担当国についての学習。集めた情報に基づく政策立案。実際の議場での議論、交渉。参加者はこれら全てを高い質で行うことを要求されます。加えて、模擬国連には明確なゴールがありません。会議において何を目指すのか、参加者は自らの軸を持って会議に臨まなければなりません。このように多様な要素を含む模擬国連は、必然的に多様なニーズを持った参加者を惹きつけ、個々人が様々な目的の下、その活動に参加しています。

今回派遣生が参加した国際大会は、模擬国連の「多様性」を最もよく体現するものでした。世界各国から来た豊かな背景・個性を持った参加者が、一つの議場に集合し、英語を用いて議論する。多様性で溢れかえった、自らの常識が全く通用しない場所で、如何に「自分がそこにいる意味」を示すことができるのか。そんな困難な問いを派遣生は問われ続けました。

私は渡米前から会議本番に至るまで、会議サポートを行い、最も近くで会議を見てきましたが、彼らには常に驚かされてばかりであったということを白状しなくてはなりません。渡米を終えて振り返ると、彼らが会議に注いできた情熱が並大抵のものではなかったことがより一層感じられます。

まず会議準備の段階での綿密なリサーチに触れなくてはなりません。書籍、インターネットなどあらゆる手段を駆使し、会議に関連する情報を徹底的に集め、論理性、実効性、様々な観点からの検討を加えて政策を練りあげました。中には専門家に実際に話を聞きに行ったペアもありました。日本代表として、妥協することなくやれることは全てやってやろう、という貪欲な姿勢に大変頼もしさを感じました。例年、日本代表団のリサーチは賞賛されていますが、今年も議場で最も豊富な知識を持っていたのは日本団の派遣生であったと感じます。およそ半年をかけてこのために準備してきたという自信は、彼らの本番での会議行動にしっかりとした基盤、根拠のある自信を与えることになりました。

会議本番においては、彼らの状況への対応力に驚かされました。事前準備や会議前の数日で、

Global Classrooms

実際に自分たちが議場でどのように行動するか、どのように他の大使は動くだろうかなど、多くの時間を費やしてそれぞれのペアと検討しました。しかし、実際に会議が始まってみると想定していた通りに進んだ会議などほぼありませんでした。そんな予想外の状況においては、慌てて冷静な行動ができなくても無理のないことです。しかし、派遣生は落ち着いて周りの状況を把握し、その時点で必要なことを判断して実行に移すことができているように思います。状況に流されることなく主体性を持って決断を下し、周囲を巻き込んでいく様子に非常に感動させられました。

そして何より素晴らしかったのは、彼らの決して諦めない精神力でした。言語の面から言えば、今回の派遣団は決して英語が得意な人が多かったわけではありませんでした。自分が言いたいことを伝えられないもどかしさ、相手が言っていることを理解できない悔しさを感じたペアは多かったように思います。しかしそこで言語の不利を言い訳にしていた人はいませんでした。言語の壁がある、ならばどうすればもっと伝えられるのか、どんな工夫ができるのか。もっとよい戦略はないか。前へ前へと思考を進め、今できるベストをやりきろうという姿勢は全員に共通したものでした。

渡米を終えた今、私はグローバル・クラスルームが日本に、そして世界にもたらすことが出来る可能性の大きさを感じています。それは今回派遣生が実力を発揮し世界中の参加者と対等に議論している姿を見たからだけではありません。それはこの経験を通して一瞬ごとに成長していく彼らに未来を感じたからだ、と言いたいと思います。本事業を果たして「成功」と呼べるかどうかは、現時点で決めることは出来ません。しかし、私のこの報告が決して大げさなものではないことが将来証明されることを期待したいと思います。

最後に、ACCUの皆様をはじめとし、今回の派遣事業を支えてくださった全ての皆様に深く感謝を申し上げ、私の報告とさせていただきます。

松野 雅人

東京大学教養学部2年

グローバル・クラスルーム日本委員会 研究補佐

この度、私はグローバル・クラスルーム日本委員会の研究補佐として、会議の内容面での派遣生へのサポート並びに大会運営スタッフ要員として、7期派遣団に同行いたしました。

まず、私自身の現地での活動について振り返ると、大会運営のスタッフ業務のため、会議サポートに関わることでできる時間はやや限られていました。その代わりに、派遣生の様子に気を配りながら、元気がなさそうな時には積極的に声をかけるなど精神面でのサポートになるべく目を向けるよう心掛けた次第です。ここでは、私の眼から見た現地での派遣生の様子と彼らから私自身が感じたものについて述べてみたいと思います。

大会開始前、彼らは少しでも時間を見つけると、観光やグルメを楽しもうとどこへでもすぐに飛んで行っていました。また、現地の学生との交流会では積極的に親交を深めるなど、与えられる機会を最大限自分の糧にしてやろうという気概が常に感じられました。その一方で、夜になると私たちのところに会議での戦略を練りに現れ、いきなり派遣生同士英語で話し始めるなどしており、彼らの行動力と熱意には舌を巻きました。

会議自体に対しても溢れる熱意のみならず、当初私が予想していたよりはるかに自信を持って臨んでいました。正直、初めて出会う英語だけが飛び交う議場の環境にもっと怖気づくかと思っていましたが、「自分たちはここまで十分準備を重ねてきたのだ、そしてどのような展開でも臨機応変に対応してみせる」という強気の姿勢がうかがえて非常に頼もしい限りでした。議場でも積極的に他の大使に声をかけ、自分の政策を売り込みにいっていましたが、私は高校生のときこんなことはできなかつたらうな、と自分を振り返って見ていると、時に彼らをうらやましく思ったものです。

会議に臨む姿勢に関してですが、彼らは最初から「アワード（賞）を狙いに行く」と宣言しており、会議後も「アワードを取れなくて悔しい」という声が聞かれました。確かに外間的には、アワードを取ることは実績を示すわかりやすい指標です。しかし模擬国連という活動は本来、アワードを取ったから勝ち、取れなかったから負けというように勝ち負けを競うもので

Global Classrooms

はないと私は考えています。国際会議を模擬することを通して、国際問題に対する知識、新たな価値観、問題解決能力などを身につけていく、それが模擬国連活動の最大の実りであるはずですが。そのため、会議前から「勝ち」にこだわる彼らの姿勢に初めはやや戸惑っていました。しかし、彼らが会議に臨む姿勢——特に会議開始後なかなか予想通りに展開しない状況に直面しながら、自分たちを議場にアピールし、よりよい議論の方向性を模索しようとする継続的な姿勢——を見ているうちに、純粹に高みを目指そう、よりよいものを創りあげようという彼らの弛まぬ卓越精神こそが「アワードを取りたい」という言葉に結び付いていたのだ、と気づかされ、はっとさせられました。

今振り返って見ると、彼らはアワードを取った取らないに関係なく、多くの「価値」を手にしたことと思います。それはアワードよりもずっと大きな意味を持つ、今回の経験でしか得られなかったものに他なりません。その感触は、彼ら自身も確かに感じ始めているようで、同時に満足感・充足感も手にしていると思います。その一方私自身も彼らに「常に現状に満足することなく理想を追い続ける」という大切な姿勢を学ぶ機会となったことをここに記し、彼らに強く感謝したいと思います。やや派遣生をあげすぎているような気もしますが、常に高みを目指す姿勢を持つ彼らなら自分たちで課題を発見してくれていると確信し、私からは特に触れずにおきたいと思います。

さて、派遣事業はひと段落しましたが、彼らにとっての本当のグローバル・クラスルームはこれで終わりではないでしょう。むしろ始まりに過ぎません。彼らが世界という一つの大きな教室で、多くの人と共に学び、彼らを巻き込み、大きく羽ばたいていくのはこれからです。彼らが今回の経験で得たものは、今後それらをどのように発揮するかによって、初めて正当に評価されることになると思います。派遣生のこれからが楽しみでなりません。

最後に、派遣支援事業にご協力いただきました全ての諸団体の皆様及びグローバル・クラスルームに関わっていただいた全ての方々、そして派遣生に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。今後もよりよいグローバル・クラスルームのあり方を、弛まぬ努力と卓越精神で追求していきたいと思っております。



馬欠場 直人

開成高等学校3年

高校模擬国連国際大会出場が決まってからの約半年、自分は様々な準備をしてきた。クロアチア大使に任命されるまでは、クロアチアについて知っていることと言えば、日本にクロマグロを輸出しているということくらいだった。様々な準備と書いたが、日本語の文献はほぼ無いに等しく、リサーチはほとんど英語の文献に頼ることしかできなかった。

そして4月に行われたインフォメーション・セッションで大恥をかい、以来、ふたりの間には「開成が一番望みがない」といった認識があった。この時ほど英語をもっと勉強しておくべきだったと思ったことはない。正直、全日本高校模擬国連大会に参加した大使の中には、自分達よりも国際大会で上手くやれる人達がいるというのは十分分かっていた。そんな状況の中で自分達は何を期待され、何をなすべきか。それは誰の目にも明白だった。全ての恥じらいをかなぐり捨て、会議の中心へと果敢に飛び込んで行くこと。すなわち、当たって砕けることだった。

苦手である英会話は、授業の空き時間にネイティブと会話練習をしたことで政策の説明などが出来るレベルにまではなったが、自分が全く知らない話をされて何も言い返せない、という状況を回避するにやはり圧倒的なリサーチ量で全てを網羅しておくしかなかった。また、渡米前最後の二週間は、開成生である自分にとって地獄そのものであった。というのも渡米のちょうど前日に運動会が予定されていたため、そちらの準備も並行して行わなければならなかったのだ。開成は運動会の準備に全力を注ぐ学校なので、模擬国連と運動会、そのどちらに対しても妥協が許されず、ただただ精神的にも身体的にもなかなか辛い2週間だった。そして、運動会を終え満身創痕となった体を引きずりながら渡米初日を迎えた。

初めはセントラルパーク、ブロードウェイで「オペラ座の怪人」を見に行くなど、ニューヨークを満喫していたが、会議が近づくにつれそのような、浮ついた気持ちは落ち着きを見せるようになり、ニューヨークでも会議の準備のために計画的に進めた。

そうしてついに迎えた会議初日。どのようにすれば、注目をあびることが出来るかを考え、渡航前から、TEDで配信されているプレゼンテーションなどを漁った。

参加者報告 (派遣生)

Global Classrooms

“視覚に訴えかけることが有効である”

自分達はスケッチブックを使うことで、聴衆の注目を浴びつつ初めてのスピーチを行う事ができた。

さて、麻薬問題は地域的な取り組みが欠かれないため、地域ごとにグループが形成されると自分達は踏んでいたが、unmoderated caucus（非着席討議）が始まるや否や、ヨーロッパでグループが形成されない、というまさかの大誤算。結局、渡邊が予め考えていた別のグループを上手く形成していたのでなんとか危機を回避し、初日乗り切ることができたものの、翌日の会議に向けて大幅な軌道修正を余儀なくされた。その日は、会議戦略の練り直しや原稿の用意などで眠れたのは空が白んできてからだった。

そして2日目。次から次へと厳しい局面を乗り切るのは非常に困難だった。それでも、前夜にクロアチアの国益にはなんら影響を与えないようなことまでスピーチ原稿の用意をし、そしてそれを使うタイミングまで決めて置いたことが功を奏したのか、着席討議の中で何度もスピーチをすることが出来、十分にクロアチアの存在感を示すことに成功した。

加えて、このような状況の中でも渡邊が常に冷静でいてくれたお陰でクロアチア大使としてはDRに文言を落とし込むことも出来、国益の獲得も適い、自分達は最高のクロアチア大使を演じきれたのではないだろうか。

今回の会議では、全体的に大使達が自国益の達成というよりも、麻薬問題をいかにして解決していくか、ということに主眼を置いていたように見える。中には完全に自身の個人的な意見を主張している大使もいた。そういう意味で全日本大会とは異なっていた。しかし、レベルは決して低いものではなく、違う側面を重視していたに過ぎない。

そして自分達は、その二つの模擬国連のギャップにいち早く順応し馴染めたからこそ、このように目まぐるしく、流れが予想外の方向に動きまわるイレギュラーな会議の中で、一番臨機応変に動いていたと自分は確信している。

会議中に、何度会議戦略の練り直しを行ったか、思い出すことが出来ない。会議の流れが変わるたびに、一つ一つスピーチ原稿も書き直さねばならなかった。時間の限られた中での作業だったのでかなり神経をすり減らしたが、最後のスピーチが終わった瞬間に、自分は大きな拍手に包み込まれた。その瞬間というのは、自分

の中で一つ大きな壁を乗り越えた、いやぶち破った瞬間であった。全ての恥じらいを捨て、当たって砕ける覚悟で望んだからこそ達成出来た結果であった。

正直な話をすると、全日本大会が終わって以来、模擬国連に対する考え方の違いから、リサーチの質に至るまで、渡邊と上手くいかない日々が続き、お互い辛い思いもたくさんしてきた。迷惑もたくさんかけてしまった。しかし、だからこそ、お互いの良さを最大限に発揮できた今回の会議に非常に満足しているし、またそれを誇りに思っている。賞の受賞は逃してしまったが、それ以上に大きくて、小さくて、そして価値あるモノを自分は得ることが出来た。そんな機会を与えてくださり、サポートして下さった全ての方々に謹んで、感謝を申し上げながらこの私の参加者報告を終わらせて頂きたいと思います。



Global Classrooms

渡邊 克也

開成高等学校3年

僕にとって模擬国連は“挫折”の象徴だ。

——最優秀賞はサウジアラビア——

閉会式で賞が発表されたとき、僕の最後の模擬国連は幕を閉じた。思えば、初めての模擬国連であった春の練習会も、このような感じであった。ニューヨークに行けると聞いて始めた模擬国連、今までいろんなことをそれなりにこなしてきた僕は、今回も何とかかなと思ってた。しかし、会議が始まってみるとそんなことは全て幻想だということに気づかされ、それどころか、会議終了後の他愛も無い雑談にさえ加われなかったのだ。いつも輪の中心にいた僕にとっては、初めての完璧なまでの“挫折”だった。その年の全日本高校模擬国連大会で優秀賞をいただき、高校模擬国連国際大会に参加させていただけることになったが、最初に書いたように、また“挫折”に終わってしまった。しかしここで大事なことは、“挫折”であって“失敗”ではないということだ。

というのも、僕と馬欠場のペアはベストを尽くし、かつ目標を達成することができたからだ。僕たちが何を体験し、何を得たのか、後輩に役立つと思われるいくつかのポイントにしばって書いていこうと思う。

まず全ての模擬国連に共通することから。僕たちがベストを尽くせたと切り切れる大きな要因は、全日本大会では成し遂げ得なかった役割分担を、完璧にできたことだ。具体的に言うと、馬欠場が議場に見せることを全て担当し、僕が議場の把握や指示を全て担当した。この役割分担の良いところは、お互いの得意なところにお互いが集中することで、そのペアの強みを最大限に発揮できることだろう。中途半端にならないので相手の印象にも残りやすい。実際、馬欠場は会議前の議長や参加者への挨拶・議長に気に入られるためのダンス・スピーチでのアピールなどに取り組んだ結果、拍手やクロアチアコールを議場から何回ももらい、みなを率いてダンスしている動画がクロニクルに載るなど、恐らく今まで誰も達成できなかったであろうことを成し遂げた。

次に、全日本大会ではなく国際大会に参加するにあたって重要となってくる。それは価値観の違いに対応することだ。全日本大会と国際大会は限りなく異質なものだ。しかし、それは所詮文化の違いでしかない。郷に入っては郷に従えという言葉があるが、アメリカの価値観をもつジャッジに日本の価値観を押し付けても、何も産み出さず、それはエゴでしかない。むしろ、そのような行為は逆に自分を追い込むだけだろう。国際大会に参加する人は、アメリカにおいて何が評価されて何が評価されないのか、しっかり見極めなければならない。

具体的にどのようなことがあったのか追っついていこう。まず日本では最初から包括的なグループが形成され、そのなかで決議案(DR)が作成されていく。しかし、アメリカはまず論点ごとに絞られたグループが作成され、各国の一番主張したい点を知りたがる。そしてそれが一致しそうな国とまず、最初のグループを形成するのだ。僕たちは最初、地域性が大きく関わる麻薬問題においては、絶対にEUグループができるだろうと予想していたが、そのようなものは影すら見えなかった。ここで議場の流れがおかしいと指摘するという選択肢もあったが、僕たちには価値観に対応するという前提があった。なのでここでは議場の流れに逆らわず、中継地規制という論点にしぼったグループを作成するという判断を下した。

二番目は、圧倒的な moderated caucus (着席討議) の多さと unmoderated caucus (非着席討議) の少なさ。日本ではグループ形成や DR 作成のため、多くの非着席討議が取られる。しかし、アメリカにおいて非着席討議は数えるほどしかとられず、逆に第 1~2 セッションあたりで、ひたすら論点ごとに各国がどう思っているかの着席討議が繰り返される。このことは、議場整理に着席討議を使うことが一般的な日本形式の模擬国連会議とは異なる。しかし、この膨大な情報をうまく使えば、より効果的にグループを集めることができる。さらに言ってしまうえば、自国が遠慮している間に他国はどんどんアピールしているのだから、ここでも積極的に発言すべきだろう。僕たちは最初、“クロアチアは中継地規制”という認識を議場に広めるため、混乱を防ごうと関係の無い発言を控えた。しかし、全ての論点に関して原稿を用意はしてあったので、最終的にはそれを用いて積極的に発言した。加えて、日本的な着席討議の進め方、つまり議場整理のため各グループの主旨を聞

Global Classrooms

くというのを聞いたのは僕たちだけだったので、評価されただろう。

三番目はコンバインについて。非着席討議が少なかったことの影響で、一日目終了時点でDRの草案を提出したのは僕たちのグループのみという状況だった。他の会議と比べてもかなり特殊な状況だったが、①各グループがあまりにも論点を絞りすぎていること②コンバイン交渉が全くなされていないことから、明日もコンバイン交渉を先導していくことで目立てると考えていた。しかし、ここはアメリカだった。僕たちが朝一のスピーチで包括的DRの必要性を訴えようとしたとき、スピーチをしたコロンビアが同じことを訴え始めたのだ。昨日までずっと論点をしぼることを主張していたのにも関わらず。また、僕らの会議では、コンバイン作業は会議場外の廊下でひっそり行われていたので、後輩たちにはこの会議流れに乗り遅れないように気をつけて欲しいと思う。

アメリカから帰って来て自分たちの会議行動を振り返っても後悔する点はない。僕たちは参加賞をいただいた。これは紛れもない事実であり、「勝ち負けは重要ではない」という考え方は、予防線を張っているようで僕は好きではない。ただ、「勝ち負けだけが全てではない」ということも、また事実である。「挫折」を乗り越えることが次につながることを僕は知っている。最後の模擬国連会議を終えた僕に何ができるかと考えたとき、後輩の存在にたどりついた。高校生のうちにもう一仕事しようと思っている。

僕たちは数え切れないほどたくさんの先輩方のお世話になりながら、ここまで来ることができた。僕たちは先輩方に何かを返すことはできない。だが、だからこそ後輩に力を注ぐことで先輩への恩返しとしたい。生意気ながら僕はこの関係を、美しいと思う。恩返しの一貫として、この報告書が少しでもみなさんの助けとなれば幸いです。



小長谷 理枝

実践女子学園高等学校3年

高校模擬国連国際大会出場が決まってからの半年間、というよりも、私が全日本高校模擬国連大会に出場したいと決めてからの1年半はめまぐるしく過ぎ、しかし何よりも充実したものであった。

以前に姉も模擬国連に参加していたので存在自体は中学2年生のときから知っていたが、議題のサーチ等、体力的にも精神的にも大変なを目の当たりにしていた。そのため、当時は自分がまさか参加するとは考えてもいなかった。しかし高校生になり、度々運動部の友人を見ると、このままのんびり過ごして受験を迎え高校を卒業したくないと思った。私も彼女たちのように何かに打ち込みたいと思った。そんな時、第5回全日本大会でニューヨーク行きに選ばれた同級生2人の輝く姿を見て、彼女たちに憧れ、のちにペアとなる村田を誘い、出場を希望した。

全日本大会ではそれまで自分たちが準備してきた成果を十分に発揮できたと思う。何よりも会議を楽しめたことに、一番満足した。それも自分が所属したDR(決議案)グループのおかげである。正直、自分たちは全日本大会に出場し、充実した気持ちで終わることが最終目標だったため、国際大会に出場できるとは思っていなかった。今でも、「オーストラリア大使、実践女子学園高等学校」と呼ばれた時の感情の高揚は、忘れられない。

全日本大会が終わって数週間後、早くも国際大会の準備が始まった。今年度派遣団の担当国はクロアチアで、その中でも私たちは世界貿易機関(WTO)会議を担当することになった。議題は、「Preventing and Combatting Illicit Trade」すなわち、不正貿易をどう防止していくかについてだ。私たちはまず不正貿易の定義付けから入った。なぜなら国によって不正となるものは違うからだ。また不正貿易といっても多くの種類があるため、それらすべてに適応し、かつ国益も考慮した解決策を作らなければならない。私と村田は考えに考えぬき、またグローバル・クラスルーム日本委員会の理事会の大学生の方々の助けもあり、自分たちの納得のいく政策を作りあげることができた。あとはこの政策をどのように英語で伝えていくかが問題だった。私は正直英語に自信がなく、今までもあまり力を入れていなかったため、この派遣を機に英語

Global Classrooms

力を向上させようと思い、半年間できる限り英語にも励んだ。目標にしたのは、国際大会でも全日本大会のように成果を発揮し、会議を楽しむことだった。

迎えた会議1日目、始まるまでの間スピーチの練習を何回も行い、近くにいた他の大使に挨拶をして会場入りをした。私はてっきりAを始めに、前からアルファベット順に座るのかと思っていたため、クロアチアの席が後ろから3番目だと気付いた時は少し不安だった。去年の派遣団の同級生から国際大会の会議は参加人数が多い分、スピーチを希望しても順番が一向に回ってこないと聞いていたからだ。案の定、会議が始まってから私たちクロアチアはなかなか当ててもらえず、この日は1回、Moderated Caucus (着席討議)で皆の前でクロアチア政府の非政府組織(NGO)との協力について言えただけだった。また他国との交渉もあまり上手くいかず、自分たちの政策を聞いてもらえるだけで、そこから先の進展が何もなく、結局どこのDRグループにも所属することができず1日目終了してしまった。思うように動けなかった理由としては、全日本大会との雰囲気の違いになかなか慣れなかったこともあるが、一番大きかったのは英語の壁にぶち当たり、途中で自信を失くしてしまったからだった。その夜、もう一度行動計画を練り直し、2日目に臨んだ。目標は、朝のうちどこかのグループに入ることであった。最初、話をつけていたグループと色々あったものの、なんとか違うグループに入ることができ、そのグループ内でもかなり良い立場になれた。またスピーチも2回以上することができ、自分としては納得のいく形で2日目の午前の会議を終ることができた。午後は各DRグループから提出されたDRについて議論、投票するだけだった。しかし私たちは一度も発言することなく、投票も終わり、会議も終了し、表彰式に移った。結果としては、クロアチアの名前は呼ばれず、主に目立っていた大使が次々に受賞していた。

2日間の会議を通し、受賞はできなかったものの、その時は2日目から自分たちなりに挽回できたことに満足していた。しかし、自分の中でまだすっきりしていないものが残っていた。帰国してから冷静に今回の自分の行動を振り返ると、半年間準備してきたものを十分に発揮することができず、会議を純粋に楽しめなかったことに気が付いた。今回の国際大会にむけた自分の一番の目標が、達成できなかったのだ。なぜできなかったのか、一言で言うと、自分が

積極的でなかったからだ。どこかのグループに入ることにしか考えていなく、自分たちの政策中心の新たなグループを作るチャンスがあったことに、今になって気付いた。

しかし私は会議も含め、今回の派遣事業でたくさんことを学び、得ることができた。セントラルパークでのバディースクールとの交流、国連クロアチア共和国政府代表部訪問、国連平和維持活動局 中満泉 中東・アジア部長によるご講演、国連日本政府代表部訪問。どれも心に残る、貴重なものばかりであった。そして何よりも、今回一緒に7期として派遣した「仲間」を得ることができた。半年間、それぞれ議題は違ったが、かける情熱は一緒だったと思う。私自身、会議のことやそれ以外のことで励ましてもらったり、助けてもらったりした。他の11人と過ごした7日間はかけがえのないものとなった。本当にみんな、ありがとう。

そしてここまで一緒にパートナーとして模擬国連をやってくれた村田、様々なサポートをしてくださった大学生の方々、先生方、スポンサーの方々、その他大勢の方々へ、改めて感謝の意を申し上げます。皆様のおかげでこのような経験を高校生ですることができました。本当にありがとうございます。

最後に、今回私が印象に残った中満泉 中東・アジア部長のメッセージを二つ、紹介したい。

一国連では、自分から国籍のカラーが無くせたら成功。

一リーダーとは、弱い人のことも考え、弱い人のためにも動く人。



Global Classrooms

村田 有彩

実践女子学園高校3年

チャレンジをすることの大切さ。11月に行われた全日本高校模擬国連大会が終わった時、“チャンスに向かっていかにチャレンジするか”ということが私の心に強く残った。それは、憧れから始めた高校模擬国連が知らぬ間に自分自身と切っても切りはなせない存在となり、全日本大会において優秀賞を勝ち取るまでになったからだ。やればやるほど素晴らしいものが得られるこの高校模擬国連に参加したこと、そして切磋琢磨しあうことのできた7期派遣生のことを私は誇りに思う。

私にとって今回の高校模擬国連国際大会は、自分の欠点と向き合い、長所を伸ばし、視野を広げる最高の機会であった。1日目はうまく周りの流れに乗りきれず、柔軟に考えを適応させる会議行動をとることができなかった。クロアチアとしての立場を通すことか、リーダーシップを貫くことのどちらを優先するべきなのかをすぐに判断することが出来ず、全体的に臨機応変に判断し積極的に動く力に欠けていた。しかし、グループごとの特徴や内容などを汲み取ることで、各グループの代表に対して交渉をすること、全日本大会で出来なかった周りを見ることができた。また、会議内で最も大使としての自覚を持って参加したことを自負している。

2日目は、前日までにまとまっていた二つのグループのコンバインを率先して良い方向に持っていき、リーダー国として自国の案を通し続けた。1日目の反省を活かし、遅れを挽回した。最後まで賛成票を増やし、一番多くの票を得て可決まで持っていくことができた。しかし、自分たちの力で周りを動かせたというよりも、自分たちが動けたというだけであった。今回の会議で自分にできることを全て出し切れなかったのには二つの原因がある。

一つは英語でのコミュニケーションによる言語の壁である。これは私が長年逃げ続けてきたものであった。相手の言っていることを正確に理解し、自分の意見を即座に伝え、柔軟に行動するにはやはり英語のレベルが足りなかった。どの国にも負けない政策はあるのに、英語というツールによって伝わらないことが悔しかった。

二つ目は自信である。自分に自信が持てなかったことで行動が消極的になってしまった。特にこの自信が全日本大会の時の私との差であ

る。渡米中に一人のアドバイザーから“根拠のない自信は大切だ”という言葉をいただき、その時は分かっていたつもりでいたが後になって身に沁みてその本意が分かった。

国、言語、状況などに関らず自信を持ち、世界にて活躍できる人間になるためには、私はこれからコミュニケーション能力を磨き、また、多くの経験や人との関係を築き上げていかなければならないだろう。

最後に、模擬国連に携わる後輩に伝えたい。模擬国連において目標という限界を決してつぐらないでほしい。目標があると、どうしても自分で見切りを付けてしまいがちになる。目標でなく一つの目的として頑張れば必ず結果はついてくるものだと思う。模擬国連は、個人に備わっている能力だけではなく、むしろ努力と熱意によるリサーチが重要であったと実感している。私は、模擬国連で必要なスキルや、知識は周りに比べ低かった。しかし、模擬国連から学びたいという思いは人一倍あった。その思いが最後まで、この模擬国連と私をつないできたものだと考えている。私は将来、世界に女子教育を広めていきたいと考えている。私にとって模擬国連とは、その夢を持ったきっかけであり、支えとなる最高の経験であった。今回の渡米で達成できたことは、多かったとは言えないが、大きな舞台での素晴らしい経験ができ、自分の欠点と逃げずに闘うための準備も整った。高校生であるこの時期に、かけがえのない経験をさせていただきました。また、ご支援、ご協力いただいた皆様にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。



Global Classrooms

有元 万結

渋谷教育学園幕張高等学校 2年

2013年5月18日。

高校模擬国連国際大会が無事終了しました。残念ながら私と私のパートナーは何も受賞することはできませんでしたが、とても有意義な2日間の会議を過ごすことができました。渡米のためにご協力くださった皆様に感謝しつつ、渡米を通して得られた経験を準備段階、2日間の会議の大まかな流れ、全体の感想、今後の派遣生へのアドバイスに分けて記します。

準備

11月に国割が決まった時から準備を少しずつ始めました。全日本高校模擬国連大会は2ヶ月しか時間がなかったに比べ、国際大会は6ヶ月という長い期間がリサーチに充てることが出来たため、非常に深いところまでリサーチできました。12月中に担当国であるクロアチアの大まかな概要を調べ終え、1・2月にかけて議題であるミレニアム開発目標(MDGs)について調べました。また、会議の感覚を失わないために、2月に学校で校内会議を主催し、会議監督を務め、提供側から議場をみることができました。3・4月にかけては具体的な政策の立案に努め、またスピーチ練習や部活を通して、リーダーシップをとる練習を重ねました。3月末の合同練習会議にも見学させていただき、非常に参考になりました。

こう書くと非常に段取りよくリサーチできていたように見えますが、実際のところは4月になってから新たな会議に関する資料が大量に発表されるなど、刻一刻と変化する国際情勢に大いに振り回されたり、Policy and Position Paper(外交方針書)を書くのに欠かせない会議の焦点を定めたUpdate Paperという資料が4月の下旬にようやく配布されたりなど、計画的にリサーチをするのにとっても苦労しました。しかし、このような計画のずれが生じることに對して臨機応変に對応できる力を身に付けるのではないかと思います。また、計画を綿密に練りすぎず、おおまかな枠組みにとどめておく必要性も学んだと思います。会議の行動計画もあまり具体的に練りすぎず、その場に応じ、柔軟な對応を取ろうと思いました。国際大会はいくら計画を練っても予測不能の事態に陥ることが多いことが今回の会議でよくわかりました。

一つだけリサーチ段階で自分たちが不十分だったのではないかと思ったのはスピーチで

す。国際大会では非公式討議でも moderated caucus(着席討議)の方が好んで採択され、unmoderated caucus(非着席討議)は2日間を合計しても2時間に満たなかったぐらいだと思います。ですので、スピーチ練習は、とにかくたくさんやるべきでしょう。リサーチを通して会議の内容や自分の政策に自信を持った後、素早くそれをアウトプットできるように努めなければなりません。この練習が少し足りなかったことが準備段階での心残りです。

1日目

私と相手は General Assembly(国連総会本会議)の Regional Committee(地域部会)の東ヨーロッパの担当だったので、非常に小さな部屋で会議が行われました。総勢30名程度で、会議の雰囲気としてはとても暖かいものでした。ですが、30人しかいないということで、目立つのが容易な反面、他も目立ちやすく、スピーチがかなめになってくる会議でした。はじめの方にスピーチが回り、存在感を發揮することはできましたが、やはりアメリカ人でリーダーシップの強いスロベニア大使と、声が大きく自己主張の強いメキシコ人のエストニア大使に会議の主導権を握られてしまい、物事を上手く運ぶことが出来ませんでした。小さい会議だと、決議案(DR)作成の際に主導権を握ることで一番存在感が發揮できるようです。

時間配分的な面では、午前中にDRの草案を書き終え、午後の基調講演の間にそれをリーダーの国二つがまとめ、1日目の最後に提出するという少々慌ただしい予定でした。DR草案を事前に作成し会議場へ持ち込むことはできないので、暗記する勢いでなければいけません。私はこのような全日本大会とのギャップに非常に驚き、やりにくく感じました。

2日目

2日目は五つの Regional Committee が集まり GA Plenary という会議が行われました。欠席の大使を除いても250人程度と、国際大会の中で最も大きな会議であり、1日目とのギャップに非常に驚きました。この日の大まかな予定はそれぞれの地域で採択されたDRをコンバインして包括的な修正案を作ることでしたが、コンバインは大きく失敗し、結局提出された七つ程度のDRのうち三つしか投票にかかりませんでした。私たちクロアチアがスポンサーとして参加していたDRは内容的にはもっとも密度の濃いものでしたが、時間の関係で討議さえされずに

Global Classrooms

会議が終わってしまいました。

2日目の会議を通して私は有力な人とともに、修正案を作っていくという手順はしっかりと踏めた気がします。

全体の感想

賞の有無はともかく、今回の会議で私は、海外における外交官としての評価の基準が見えた気がしました。また、全日本大会で大使に求められているものと国際大会で大使に求められているものちょうど間に本物の大使に問われる性質がある、ということにも気づけた気がします。全日本大会では具体性と協調性、現状と理想を把握した現実性が重視されます。それに対して国際大会では、スピーチなどのアウトプットが重視されます。正直賞をとれなかったことが確定したとき、当初は憤りや悔しさもありましたが、考えていくにつれて、アウトプットも外交官・大使としてとても大事な素質だと気が付きました。今では、それらの力が少々不足していたのではないかと思います。

今後の派遣生へのアドバイス

リサーチも政策立案も大事ですが、国際大会では何よりも的確なアウトプットが必要とされます。リサーチの成果が十二分に発揮できるよう、言語にかかわらず、自分の意見を発信できるようにしましょう。人に何を、どういう風に、どのような手段で伝えるかを常に意識し、それらに基づく最高のパフォーマンスを模索していきましょう。そして何より、臨機応変に何事にも対応できるように表現を豊かにしていきましょう。抽象的な話になってしまいましたが、全日本大会を乗り越えた皆様ならきっと出来るはずですよ。



森川 佳奈

渋谷教育学園幕張高等学校 3年

はじめに

2013年5月14日、私はニューヨーク行きの搭乗券を手に、7期派遣生と共に成田空港にいた。憧れの大会への出場が決まった時から心待ちにしていた日だった。

私の模擬国連との出会いは小学6年生の頃、先輩方がグローバル・クラスルームの高校模擬国連国際大会に派遣されたという記事を読んだ時である。国連という組織に憧れ、外交の世界を夢見ていた私は必ず挑戦しようと思った。その後、海外駐在など機会に恵まれ、中学3年生の時、本格的に模擬国連活動を始めた。全日本高校模擬国連大会には、パートナーとインドネシア大使として参加し、優秀賞を受賞することができた。

各所訪問

渡米の2日目は、国連クロアチア政府代表部、国連平和維持活動局 中満泉 中東・アジア部長の事務所、そして国連日本政府代表部を訪問した。私は国際政治の舞台で活躍されている方と会談できることに感激しており、事前に質問が募集された際に、自分の議題、ミレニアム開発目標(MDGs)のことや、自らの興味関心について、たくさんの質問を送った。その甲斐があったのか、実際の訪問の際、MDGsの話詳しく伺えた上に、国連日本政府代表部では資料までもご用意いただいた。特に国連クロアチア共和国政府代表部では、それまで推測だった政策が本当に国益にかなうものなのかを確かめることができた。

「本当のリーダーとは、人々を inspire する人。」これは中満さんが話してくださった理想のリーダー像。一番弱い立場の人、声なき人のために活動する人々が多数いる中で、実際に人々を引っ張っていき、リーダーとして認識される者は人々を奮起させることができる人であるという。逆に、人々の心に訴えることのできないリーダーは、何も成し遂げることはできない。私は、中満さんのような素晴らしいリーダーになろうと強く思った。この言葉を心に刻んで大切にしていきたい。

地域別会議

会議の流れの前に、まずは地域別会議の話をしてほしいと思う。私たちの会議は初日に五つの地域に分かれ、2日目は全体会議を開くという特

Global Classrooms

徹的な会議だった。クロアチア担当の私たちは初日に東ヨーロッパ 20 カ国と、そして 2 日目は 193 カ国と討議することになった。

地域ごとの会議で利点なのは少人数だということ。少人数だと全体の流れを把握しやすく、主導権も握りやすい。発言の機会が多いため、議場に自分の意見や政策をアピールできて、決議案 (DR) にも反映できる。その反面、地域ごとに部屋が分けられている為、他の地域がどのように議論を進めている、何を論点とみなしている、どのような DR を作っているのかが全く読めない。

私たちはこれを念頭において、会議が始まる前日や開会式の時から他の参加者に声をかけ、知り合いを増やしていった。そうすることでどのような大使と議論することになるのかを把握し、初日の地域別会議の後に情報交換できるようになった。そのかいあって、1 日目の終わりには他の地域の大まかな流れが把握できた。

議題 MDGs Review Conference

MDGs とは、世界の最貧困層のニーズに応える試みである。八つの目標で形成されていて、達成期限は 2015 年。議題には主に二つの論点がある：①MDGs を 2015 年までに達成する為に取り組むべき行動と、②2015 年以降のアジェンダの方針を討議すること。クロアチアはどの目標に関しても達成間近だったため、比較的やりやすい議題だった。

会議当日

初日の朝、議場にいた大使に声をかけ、事前に用意した政策の概要を記した紙を渡した。本来の作戦としては、政策を読んでもらった上で、公式討議を開き、私たちの政策を発表・説明する予定だった。しかし、会議が始まって早々、議論するというよりは主張の連続という状態だった。

ここで私たちは急遽作戦を変更して、自分たちの政策を発表するよりも、東ヨーロッパ内で主導権を握ることの方が大事だと判断した。MDGs は基本的に対立軸がなく、私たちの政策も反対意見がでそうなものではなかったため、後からでも DR に盛り込めると思ったからである。パートナーが、論点①を中心に議論していた大使たちと一緒に議場を仕切る間、私は数人の大使と論点②を話し合った。時間に追われたが、結果的に両方の論点を合わせた DR を提出し、20 カ国中 19 カ国の賛成で可決された。急な作戦変更ではあったが、準備と自信があった

から上手く行ったのだと思う。その後、議長にも良かったと声かけてもらえた。

1 日目は発言機会に恵まれ、ペア行動も成功したものの、2 日目は全く発言ができなかった。東ヨーロッパ内の団結力も弱く、意見が反映されていないと感じた大使が脱退し、中心的なスポンサーの間でも対立が生まれてしまった。この混乱によって連絡も上手く回らず、私がラテンアメリカとコンバイン交渉している間にパートナーは西ヨーロッパ等と交渉を進めていたということも起こった。最終的に西ヨーロッパ等の国とコンバインし、クロアチアはスポンサーとして DR を提出することができた。

悔いは残っている。国益を予想以上に達成したものの、受賞には至らなかった。一日目はベストを尽くせたが、二日目にコミュニケーションが上手くいかなかった。

最後に

これからの派遣生の皆様に伝えたいことを箇条書きで挙げたい。

- 一番重要なのは政策のボトムラインをしっかりと決めること。そうすることで会議の流れに臨機応変に対応できる。
- 国際大会では国益とともに国際益が重視される。
- 政策に関しての反論が少ない。詳細を聞かれることも減多にない。
- 内容の濃いスピーチよりも印象に残るスピーチが大事。
- Unmoderated caucus (非着席討議) は最長 20 分しか取れないから、Moderated caucus (着席討議) をどう活用するかが重要。
- ペア・グループの他のリーダーとこまめに連絡をとるべき。
- 関係のない着席討議はない。積極的に議論に参加するのは大切。

高校模擬国連国際大会に出場するにおいて、たくさんの方の支援を頂きました。JCGC、ACCU、支援協力団体の皆様、引率の先生方、先輩方、そして応援して下さった皆様、貴重な経験を本当に有り難うございました。

5 年間目指してきた国際大会を終えた今、改めて模擬国連の魅力を実感しています。世界の高校生と国際問題について政府の視点から議論することで学んだこと、手に入れたことは計り知れません。そして素晴らしい 7 期派遣生と出会えました。互いに刺激し合い、高め合えるような仲間になれたことを誇りに思います。決

Global Classrooms

して理想の会議になったとは言えないが、改めて国際社会の広さを感じ、貢献したいという思いを新たにして自分の成長に繋げていきます。



小泉 喜之介

桐蔭学園中等教育学校3年

「日本人とは何か?」「国際人とは何か?」……今回の派遣事業は、これらを改めて問い直す契機となった。

全日本高校模擬国連大会で優秀賞をいただき、ニューヨーク行きが決まった時、真っ先に感じたのは期待より不安だった。そもそも客観的に見て、自分は派遣生の中で最も交渉能力が低い。普段から積極的とは言い難いタイプのため、全日本大会の時から「模擬国連用の自分」を作り積極的に動くように努力はしていたが、やはり周囲との間には埋めがたい能力差があり、自分自身それがコンプレックスだった。しかし、自分は少なくともペアよりは英語ができるとの自負があったため、世界大会では自分が引っ張っていこう!との決意を胸にニューヨークへと飛び立った。

会議中は、様々な点で驚かされた。まず会議序盤、まったく **unmoderated caucus** (非着席討議) がない。議長裁量によって(英語力不足のため正確にはわからなかったが)、スピーチもあまり回さずひたすら **moderated caucus** (着席討議) が続いた。先輩方から、アメリカの会議は着席討議が多い、と聞いてはいたが、まさかここまでとは……とあつけにとられた(結局スピーチは2日合わせて15人程度、非着席討議は2日合わせて1時間程度だった)。なんとか2回着席討議で話すことができたが、ここでもっと話せなかったことは、議場全体への働きかけという観点から見て大きな痛手だった。

驚いたのは、スピーチや着席討議の時に海外の参加者が競い合うように手を挙げていたことであり、その迫力には圧倒された。なんとか決議案 (**DR**) 作成グループを作ることはできたが、予定していた会議行動が狂う場面も多く、特に会議序盤は苦しめられた。不幸中の幸いだったのは、自分たちのグループに強敵となるような大使がおらず、比較的自由にグループを動かせたことだ。

会議二日目、非着席討議の短さを考慮に入れた会議戦略へと切り替え、多少大雑把にアメリカ流に合わせた動きに持ち込んだ。結果、提出期限ぎりぎりではあったが **DR** を事前想定と似た形で作ることができ一安心、あとは着席討議と他グループとの投票交渉が目立てば……と考えていた。しかし、そこで大きな落とし穴があった。「議長裁量」。**DR** が乱立したため、似たような内容の **DR** グループを指名し、コン

Global Classrooms

バインを義務付けた。ここまでなんとか乗り切ってきた英語力も、多人数での激しい交渉になった瞬間まったく使い物にならなくなった。議論の中心に立てないまま交渉が進み、結局相手グループに吸収される形でのコンバインとなってしまった。

今回賞を取ることができなかった要因には、①着席討議の機会を活かしきれなかった、②英語力の圧倒的な不足、③議場全体に働きかけられなかった、の3点があげられる。

自分にとって今回の会議は、積極性を試すよい機会でもあった。言語の壁を越えていかに一歩前に入る勇気を出せるか、そういった意味では達成できたことも決して少なくはないはずだ。また、多くの外国人の行動にカルチャーショックを受けながら、逆に日本人らしい交渉とは何なのか？そもそも日本人らしさとは何か？そして、これらまったく異なるタイプの人間と渡り合える真の国際人とは何か？こういったことを考え直す機会を得たことも大きな収穫だ。

最後に、本派遣に多大な援助をしてくださった、ACCU様をはじめとする協賛の皆様、会議内外ともにサポートしていただいた柴原さん、青柳さん、立花さん、松野さん、ペアとして背中を押してくれた増渕、そしてすべての派遣生のみんなにお礼を申し上げます。



増渕 翔

桐蔭学園中等教育学校3年

“Global classrooms International highschool Model UN Conference” 模擬国連を高校に入ってから2年間続けてきた僕にとって、この大会への参加を含めた渡米経験は一生の糧となると確信している。

例年に比べて充実したスケジュールになっていると聞かされていたので、かなり忙しい渡米期間になることを予想していたが、一つ一つの行事が新鮮な上、貴重な経験だったので時間忘れるほど楽しめた。特に、国連クロアチア共和国政府代表部、国連平和維持活動局 中満泉中東・アジア部長の事務所、国連日本政府代表部訪問は、会議を控えた僕達参加者にとって、国を代表するものとしての考え方、クロアチア大使として考えるべき事を学び、感じることの出来た非常に有意義な時間だった。僕を含め参加者全員がここで学んだことを生かして全力で会議に挑むことが出来たと思う。

僕等は世界保健機関（World Health Organization）に参加し、Generic Drug に関して議論する役割を与えられた。

Generic Drug は日本で大きな問題として取り上げられることは滅多に無く、事前準備は海外のウェブサイトや文献を使用しなければならなかったため、英語力に不安を抱えていた僕はかなり苦労した。更に議題が漠然としている点や、本来は世界貿易機関（WTO）で話し合われることが多い本議題を WHO としてどう議論していけば良いのかなど、議題としての難しさもあった。しかし、議題のリサーチや英語力の不安というものは一朝一夕に解決できる問題ではないことはわかっていた。だとしたら、自分にできることは何なのか？世界という舞台で、今まで自分が培ってきた経験の何を活かせるのか？そんな自問自答を僕は渡米前に繰り返し行っていた。出てきた答えはシンプルなもので、自分の培ってきた“模擬国連としてのスキル”と“言語力以外のコミュニケーション能力”は通用するだろうというものだった。

僕等はクロアチアとして、Generic Drug に対して包括的な決議を作成し、可決させるという目標のもとに様々なパターンの会議行動と政策を用意していった。

事前準備では参加国をグルーピングすることに最も時間をかけた。WHO には 145 カ国も

Global Classrooms

の国が参加する予定だったので、すべての国をリサーチするのはほぼ不可能かつ、全く意味を持たない作業であると考え、五つのグルーピングを行った。ここでは大きく分けることが重要である。アメリカという異国の地、自分達が慣れ親しんでいない議場での一番の不安要素は、自分達が予想していなかったことが起きることである。それは議長裁量かもしれないし、重要国の欠席かも知れないが、それらによって用意してきた会議行動が乱された時にダメージは小さくはないと思う。その為、たとえ提案する政策が影響を及ぼす国であったとしても、一つの国に対して深入りすることや、細かいグルーピングはおすすめしない。グルーピング以外にも必要とされるリサーチは十分に行うことが出来た。

渡米期間中は色々な不安要素が自分の中でも大きくなってきていたが、自分達の準備に対する自信はそれ以上のものになっていたと思う。

迎えた会議初日。会議の流れが全日本大会とくらべて大きく違うところは、**moderated caucus**（着席討議）中心の会議であるということ。初日はこの流れに対応するのに少し時間はかかったが、メモなどを使いながら、グルーピングの準備を行い **unmoderated caucus**（非着席討議）に備えた。

やっとのことで訪れた非着席討議もわずか15分間しかなかったが、その中である程度の数の国を集めることができ、グループを形成した。その後の貴重な非着席討議の中でグループ内での意思統一、スポンサーの数合わせを行い、最終的に決議案(DR)を提出することができた。

会議2日目は多くの時間が、修正案の作成に充てられた。初日に15本のDRが提出されるという事態だったが、フロントから似ている文言を持つDRはコンバインを行うようにとの指示が出された。

時間のない中でのコンバイン交渉は、日本でのように一つ一つの文言をDR参加国に確認をとることもなく、非常に雑に行われた。更に、交渉に戸惑ってしまったため、自分達の思うようなアmendメントは提出できなかった。

結果的に、僕等の提出したDRは一票差で可決された。大きな枠組みでグルーピングを行ったことにより、多少の不測の事態にも柔軟に対応できたが、やはり価値観の差が、交渉に与え

る影響は大きかった。

これは、アワードが取れなかった要因にもなると思うが、様々なバックグラウンドを抱えた参加者の価値観を尊重した上での交渉がいかにも重要かということ学ぶことが出来たと思う。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えて下さった関係者の方々、誠に感謝しております。ありがとうございました。



Global Classrooms

高島 峻輔

灘高等学校 2年

次々呼ばれていく国名。しかしやはりと言うべきか、なかなかその名前は呼ばれなかった。“the delegation of...Croatia”——その瞬間、今までの日々が走馬灯のように蘇ってきた。たくさんの方に支えられ、励まされ、そして導かれた半年が、そこにはあった。

奇跡には、必ず理由がある。僕らの模擬国連は、まさに奇跡の連続だった。何度も予期せぬ出来事に巻き込まれ失敗もしたが、その度に運が、人が味方してくれた。

模擬国連において最も大切なことは何だろうか。リサーチ力、スピーチ力、グルーピング力、決議案作成力、そして交渉力。模擬国連において必要といわれる5つの力には、必要なある1つの能力が必要だ、僕はそう感じている。それは、「聞く」ことである。

例えば、専門家にお話を伺うとき。例えば、議場の「今」にあったスピーチをするとき。例えば、異なる意見を持つ仲間をまとめ上げるとき。例えば、仲間が持つ様々な案をもとに1つのDRを作り上げるとき。そして例えば、自分の話をしに来た相手を説得するとき。

そう、「聞く」ことは模擬国連の舞台においてまさに基本である。それを最初に、そして一番強く感じた全日本大会から話を始めよう。

——全日本大会 “Nuclear Disarmament” (China)

僕らにとって、全日本大会はまさに「逆転の2日間」だった。警戒されていたのか、舞い上がってしまったのか。事前の会議計画は瓦解し、グルーピングも最悪の状況。最初の unmoderated caucus (非着席討議) では時間を何度も確かめ、早く昼になることを願うありさまだった。

「最初の一步」がうまくいかなかった China。しかしそれを救ったのは、「聞く」ことだった。Turkey、そして Iraq。仲良くなっていた彼女たちに 2nd meeting が始まる直前の数分間に自グループの現状を教えてもらったことが、勝負を大きく分けた。こうして最終手段の「中東と組む」にハンドルを切った China は、その後も何度もトラブルに見舞われながらも最優秀賞まで駆け上がったのだった。相手の話をしっかり「聞く」ことで信頼関係を築けたことが、リーダーシップを発揮してグループをまとめる力、そして妥協点を見つけ交渉する力を引き出し

てくれた。このことが受賞に繋がったと言っても過言ではない。

——準備

全日本大会の歓喜もつかの間、次なる戦いは国際大会。お互いが多忙な日々を送る中、夜遅くまでスタバデートを繰り返して準備に励んだ。議題が「国際移住と開発」に決まったのは12月。移民問題は広範で準備もなかなか進まなかったが、念頭に置いたのは「Croatiaらしい政策の立案」である。70万人もの移民を受け入れ、同時に送り出しているばかりか、独立戦争の際には難民を出した過去を持つ Croatia。この特殊な背景をしっかりと反映しつつ、いかに独自の案を出せるか。そこが問われた。そんな中、出会ったのが「循環移民構想(Circular Migration)」である。高技能労働者の自由な移動を認めるというこの構想は、Croatiaの現状にピッタリだった。また、この構想の提唱者である関西学院大学の井口泰教授に直接お話を伺ったことで、自分たちの案が権威に認められている、という議場で主張する際の大きな自信も得ることができた。そう、まさにここでも「聞く」ことが僕を支えてくれたのだ。

主張すべき内容があっても、伝わらなければ考えていないのと一緒。後は「どう伝えるか」が一番の問題だった。英語が不安でたまたま、30秒で自国の政策を伝えるトレーニングを重ねた。そして、いよいよニューヨークへ。

——高校模擬国連国際大会 “International Migration and Development” (Croatia)

「国際大会は、行ってみないと分からない。」OBOGの誰に聞いても、答えは同じだった。全日本大会とは全く違う形式に、世界中から集まる参加者、そして何と言っても英語。不安は募るばかりだった。だから、過去の派遣生の方に何度も質問を重ね、最悪の想定まで繰り返した。でも、何もかもが想像以上だった。残念ながら、こればかりはどんなに「聞い」ても、その場に立たなければ分からない。想定通りになんて一度もならなかったが、最悪の状況を想定することは臨機応変に対応するときに非常に役立った。

1日目。最初の非着席討議で“OK! Eastern Europe, please come here!”と大声で叫んで議長に注意されたのまでは良かったのだが(?)、そこから苦しい戦いが始まった。最初に東欧の国々を集めることに失敗し、後は地道なゲリラ作戦。

Global Classrooms

僕はとにかく1人1人に交渉に行き、協力を求めた。10分間という短い交渉を終え、小さかったがグループのトップに立つことができた。そう、これまた想定外なことに、アメリカ人は話を「聞い」てくれた。アメリカ人は自分の主張しかせず、聞いてくれないと聞かされていた僕にとって、これは嬉しい誤算だった。結局、何とか“Circular Migration”を主体とした working paper を提出することができ、初日は終了。その日の夜は何度も大学生と話し合い翌日のプランを考えた。就寝前、この半年を思い返した。最後の模擬国連を楽しもう、それしかなかった。

運命の2日目。議長主導でコンバインが行われ、自分たちの思い通りにはいかないスタート。そう、これが世界の舞台。もはや初日のグループは崩壊し、ここから泥沼の戦いが始まった。パートナーは議場の外でDR作成交渉へ。議場の中には半分ほどの大使が残された。どこかで頼っていた彼がいない中で何をするか。やれることをやるしかなかった。motionを上げまくり、着席討議で発言の機会を求め続けた。結局motionは否決され、発言機会も与えられなかったのだが、もしかしたらこの姿勢も評価されたのかもしれない。

最終的なDRにCircular Migrationはわずかながら残った。そしてグループの大使には「Croatiaの」Circular Migrationとの2本立てだと説明してもらった。着席討議でも2回発言でき、話したこともないような大使からspeechの時間も譲ってもらった。わずかな非着席討議の間には必死に賛成票を集めて回った。もう出発前の不安はなかった。世界中の大使と話し、「聞く」ことがただ楽しかった。そして木槌の音。やれることはやり切ったという充実感と、もう少し周りを変える努力をすれば、というほんの少しの後悔が胸をよぎった。

最終的に僕たちの政策が入ったDRは無事成立した。結局、僕らは運に、そして人に恵まれていたのだろう。そしてそれを引き寄せたのはやっぱり「聞く」ことだった、そう思う。これは全日本大会も、国際大会も変わらなかった。

かくして、僕の模擬国連は終わった。しかし、僕の挑戦は終わらない。いつの日か、交渉の舞台から「模擬」の文字が消えるときまで。「聞く」ことから全てが始まると信じて。



Global Classrooms

吉井 一希

灘高等学校 3年

人生最初で最後の高校模擬国連国際大会を終えた瞬間、僕は純粋に嬉しかった。結果として優秀賞を受賞できたことはもちろんであるが、それ以上に、およそ2年にわたる模擬国連活動を通じて得たものが限りなく大きかったからだと思う。ここに、今から思えば一瞬にして過ぎ去った、でも素晴らしく濃い、数か月の出来事を記しておきたいと思う。

昨年11月、僕にとって2回目となる全日本高校模擬国連大会で最優秀賞を獲得したとき、憧れだったニューヨーク行きの切符に歓喜する一方で、なにか物足りなさも感じていた。全日本大会の議題は「核軍縮」だったのだが、その議題に対する深い理解ができていなかったように思えたのだ。その原因は準備する過程において、当日の会議行動を意識しすぎるあまり、議題の全体像をつかもうと努力しなかったことにあった。自分の議論を組み立て、他国の政策に反論するために最低限必要な知識をインターネットから引っ張り出し、それで決議案を準備する。会議中の他国との交渉においても、現実の議論を無視し即興でロジックを組み立てるといったこともあった。そんな準備と会議行動を通じて得られた知識は、断片的なものではなかった。

模擬国連への向き合い方に反省した僕は、国際大会では最大限議題の全体像を把握し、理解することを目標にした。国際大会における議題は、「国際移民と開発」。合法移民の管理から、不法移民の問題、あるいは難民の問題も含まれるような広い議題の中で、現状の問題点の総合的な理解に努めた。

議題に関する資料が英文ばかりの中、リサーチ作業は大変だった。その中、関西学院大学教授の井口泰教授にお話を伺えたことは、本当によい機会となった。井口教授には、過去から今に流れる移民政策の変遷と、今主流になっている移民政策、また現状の課題まで、移民政策を体系立ててご教授いただいた。移民問題の複雑さをますます実感しつつも、会議で目指す方向が見えてきて、英語力やら政策やら不安要素ばかりでマイナス思考だった中、ニューヨークに少し行きたくなり始めた。

紆余曲折を経て、私たちは「循環移民構想」という「移民を送出国・受入国間で循環させ、その両者にとって利益となることを目指す政策」を打ち出すことを決めた。その後も詳細を

詰め、僕たちが細かい会議戦略などを含めすべてが完成したのは会議前日だった。最終的に練りあげた会議戦略では、循環移民構想をはじめとする「移民の移動の管理」の必要性を訴え、このことを会議でフォーカスすべきだと訴えつつ、この構想を主軸とした決議案を作成することを目指すことにしていた。

不安で胸をいっぱいにしていて僕であったが、ついに大会が始まった。会議では、想定外のことこそ起こらなかったものの、それは予想が当たらないと想定していたというだけで、会議はこの上なく混乱していた。前述したとおり、移民の問題は幅広く、どの問題をメインテーマにするのか、という部分が各大使によって異なり、議論らしい議論が生まれていなかった。議長の裁量で着席討議が主にとられ、各大使が思い思いの政策を発表し、意見を述べるため議論はかみ合わない。言うまでもなく「何がこの会議で本当に話し合われるべきなのか」という点に対して合意は生まれなかった。それでも僕たちは何とかグループ作成に成功し、決議案の土台となる作業文書を提出して1日目を終えた。

2日目は、議長側も議論の整理に乗り出し、「移民の人身売買対策」および「移民に対する教育」の二本を柱として、決議案をコンバインするように指示があった。その中でグループの再編が行われたため、大きいグループをまとめていくだけの英語力はなかった僕たちは、自分たちの小グループすら分裂させてしまった。さらに、クロアチアが目指していた「移民の移動の管理」は議長の提示した論点に含まれず、クロアチアの政策を無理やり移民の人身売買の決議案に入れてもらうよう多くの国と交渉する必要があった。昼休みには半ば絶望していたが、議長をはじめとする運営側とも対立しつつも、何とかねじ込むことに成功。最終的にクロアチアの政策含む決議案は賛成多数で可決されて会議は幕を閉じた。

会議が終わった瞬間は高揚感と満足感に浸っていた。議場で最後までクロアチアの政策を国際社会のコンセンサスに反映するよう努力できたこと。そして、その政策は現実社会に根差した、リサーチの成果であること。こうしたことを思い出し、今までの努力が報われた気がした。

一方で、落ち着いて会議を振り返れば、反省点も多く見つかった。例えば、アメリカの高校生たちのスピーチは、素晴らしいものが多かった。150か国300人がいる会議場の中で、大使全員がスピーチに集中する、そんな瞬間が何度

Global Classrooms

かあった。それに対し、僕は、議論はコミュニケーションの中にあるということを忘れてがちになっていた気がする。もちろん綿密な政策立案を行い、それを会議に還元させようとするのは大切だが、一方でその政策をいかにわかりやすく伝え、説得力を持たせるか、ということも政策の内容同様に重要だった。そのためには、より分かりやすく伝わりやすい政策を用意する、といったことも必要だっただろう。もしより議場全体にクロアチアの政策が伝わっていたのならば、クロアチアの推す論点も、議論の柱の一つになっていたかもしれない。

僕自身の高校模擬国連の経験を思い返せば、模擬国連活動は僕にとって「世界」への入り口だったと思う。模擬国連会議の準備を通じて初めて西サハラに住む難民の子供のことを考え、ニューヨークで国連平和維持活動局 中満泉中東・アジア部長にお会いして、中東情勢の安定化が人の手で行われていることを初めて肌で感じた。そして会議を通じて、もしかしたら自分も将来、この「世界」に飛び込み国際問題の解決に貢献できるのではないかと強く感じた。この経験は、今回の派遣で得た 11 人の友と同様、一生大切にしていきたいと思う。いつか再び国際会議の壇上に立てる日が来ることを願って。

最後になりますが、この模擬国連活動を支えてくださった方々に感謝の意を表したいと思います。グローバル・クラスルーム日本委員会の方々、ユネスコアジア文化センター、学校の先生方や先輩方をはじめとするすべての方々のご協力なしには、このような素晴らしい経験を得られなかったと思います。改めて厚く御礼申し上げます。



佐藤 和宏

西大和学園高等学校 3年

“Honorable Mention is... Croatia!!”

その前に優秀賞として呼ばれた大使たちへの称賛や拍手で会場が盛り上がる中、クロアチアの名が轟いた。会場の全員が僕らの方を振り向き拍手が鳴り響く。その瞬間僕らはただ茫然として一体何が起きたのかを把握することすらできなかった。今思うと当時は喜びの許容量を超えていたのかもしれない。受賞数時間後にじわじわと喜びが込み上げてきた。

僕たちはクロアチア大使として国連総会本会議 第一委員会 (General assembly 1st committee) -Cyber Terrorism に出席した。議題のサイバーテロリズムはちょうどホットでリサーチしている期間にも韓国のサイバーテロ被害が紙面を賑わせていた。しかし僕自身は全くの機械音痴でハッキングなどの知識は皆無に近く、リサーチは予想以上に困難を極めた。

リサーチは春休み頃から本格的に始動し、関連ニュースや法制度に関する論文を読み漁った。ただし無秩序に調べるのではなくパートナーと明確にリサーチ領域を分担し、互いに重要な部分を中心に相手にシェアするという方式を採用したことで、リサーチの量は無駄に多くはならず、少なめの量で同等の知識を双方が得るという効率化を実現した。この時に重要なことは、お互いの共通認識を確認し合うという作業である。いったい議題の何が問題点で何が必要なのかという共有をこまめにすることで互いの行動や考えが相反しないように心掛けた。政策立案に関してはまず存在する問題点を全て包括できるような大枠を設けてそれに沿うように細かい政策を考えていった。具体的には 3D factors :Defend (防御), Define (定義), Drive back(反撃)を考えた。ここでの枠をなるべくキャッチーなものにすることで会議当日他の大使に受け入れられやすくし、それを基に決議案を仕上げていきその場の意見をまとめ、グループ内で優位な立場で会議を進行していこうという作戦であった。

4月21日インフォメーション・セッションでのプレゼンテーションを迎えた。この時のプレゼンのスライドは当日印刷して他の大使にも見せて説明するためにも使おうと考えていたのでインパクトがあり理路整然としたものを作るように最大限の時間を割いた。やはりプ

Global Classrooms

レゼンテーション作成に当たりその構成や内容を考えることで自分の頭の中の知識が整理され相手に説明できるようになるためにも大変有効であった。

そして迎えた渡米の日。John F. Kennedy 空港に降り立った時の興奮と緊張は今でも忘れられない。その後程よく観光や現地校交流を楽しみ、国連平和維持活動局 中満泉 中東・アジア部長の事務所、国連クロアチア共和国政府代表部、国連日本政府代表部の基調講演に感銘を受けていると時間は光のように早く経ちいつの間にか会議前日を迎えていた。会議前不安は全くなかったといえは嘘になるが、リサーチ量、会議戦略には絶大な自信を持っていたためあまり不安は感じなかった。唯一不安要素だったのは英語力だった。しかし同じ部屋の相方や他の日本代表メンバーとホテルで英会話をしたり、お互いの議題の政策について 30 秒説明の練習を繰り返し行ったことで、うまく自信につなげることができた。

いよいよ待ちに待った会議が始まった。期待と興奮で胸躍らされていた。

初日の午前中、議場には 130 組以上総勢 270 人以上いたので僕らは声を張り上げて、持参していたホワイトボードに EU と書いて EU のメンバー国を集めた。するとホワイトボードでインパクトがあったのか EU の多くの国が集まった。そして先述の大枠を提案し作戦通りそれをベースにそれぞれが持っている政策を分類させる作業に移った。しかしここでの失敗は、自分たちの案をねじ込むだけの強い自己主張が僕には足りていなかったことだった。自分の政策を話す流れを作れば、的確に話せるが、やはりネイティブは話す速度が速いのと自己主張が僕たちよりもはるかに強いためどうしても話されている内容が二転三転し、その内容に僕らが合わせようとしたため、自分の具体的政策をしっかりと伝える流れをつくることができなかった。

その後自分たちの大枠である 3D を議場にアピールし、クロアチア=3D factors と印象づけてプレゼンスを高めようという作戦であったので moderated caucus (着席討議) で 3D を大々的に宣伝し、プレゼンスを上げることに成功した。

しかし 2 回目の Un-moderated Caucus (非着席討議) でハプニングが発生した。理由は不明だが当初集まった国たちが消えてしまった

のだ。そのとき集まった国はわずかチェコ、イタリア、ブルガリアと僕らクロアチアのみであった。そこでそれらの国を中心国として決議案を作ろうという動きになった。自分たちの案を盛り込めるチャンスだと感じた僕らは、急いで昼食時に部屋に戻り、自分たちの政策を書いた紙をメンバー全員に配れるように印刷した。(会議備品として携帯用プリンターを日本から持参してあったので、急なスピーチ変更や決議案の素案印刷などに対応でき非常に重宝した。)

そして 1 日目午後の会議からは、印刷した政策を配ると皆それに賛同してくれ決議案を僕らの案をベースに作るようになった。その後英語力の差などから当初からグループ内でプレゼンスが高かったチェコがリーダー格となったが、あえて座を争いチームの輪を乱し排斥されるリスクを冒すべきではないと判断した僕らは、そのまま中心国のメンバーとして会議を進めていった。若干立場が弱まってきたと感じたため、僕はシグナトリーを集めることにした。意外に交渉はうまく進み、約 15 分間に六つの国に OK をもらうことができた。交渉の時に気を付けたことは、あらかじめ交渉に挑む前にその国の決議案がどのような内容なのかを把握、交渉時には、自分の案と共通している点を全面的にアピールし、重ならない点は軽く一文程度で説明することでうまく同意を得ることができた。非着席討議を終えると、議長は、Working Paper を書き上げるために主要国は後ろに集まるようにとの指示をした。チェコとクロアチアは互いに信頼し合っていたため、議長のもとに Working Paper を一緒に出しに行き、その日の会議を終えた。今思うとやはりグループ内で争うのではなく友好的に仲間意識を高め信頼醸成を行うことが重要なポイントであったと思う。

2 日目は、議長裁量で午前中は決議案の配布と決議案に関する Q&A が行われた。そのため、クロアチアはスピーカーズリストの一番上だったもののスピーチが回って来なかった。どうしても前日に練り上げたコンセンサスを訴えかけるスピーチをしたかったため会議をクロージングし投票に移る最後のモーションに反対し、その理由を述べる 30 秒間の間にスピーチした。結果僕たちの決議案は否決となったが今思えば終わることを望む議場の雰囲気の中でスピーチをすることは忘れられない素晴らしい経験であったと思う。

おそらくこの 7 日間は人生において最も印

Global Classrooms

象的で興奮した7日間だったと思う。世界中の優秀な人とコミュニケーションをとり、そして友人になれただけでなく、今回出会った他の一—おそらく日本を牽引するであろう—優秀な日本代表メンバーと友達になれたのは本当に大きな価値があったと思う。そして僕の内面的なことを言うならば、今回の国際大会の会議ではある特別な事を強く学び意識させられたように思う。そこで得たものは、優秀賞という形式的なものではなく、これから先の人生にも通じる教訓であった。それは、何があっても決してあきらめないこと。口にするのは簡単だが、実際に何度も挫折しそうな局面を今回味わって、これを実践するには相当の忍耐と努力が必要であるということを経験全体を通して感じた。

そして何よりも、ここで素晴らしい結果を報告できるのは、決して自分の能力が優れていたからではなく多くの人のサポートがあったからこそだと思う。ペアの西田並びにグローバル・クラスルーム日本委員会並びに ACCU 及び引率教員の皆様のサポートがあってこそ成し得たものであり、ここで感謝の意を述べたい。皆様、本当にありがとうございました。



西田 裕信

西大和学園高等学校3年

“The next Award will go to ... Croatia!”

Honorable Mention Award の発表で、自分の代表する国の名前が呼ばれた。会場がどっと沸く中、喜びは、沸いてこなかった。不思議だった。今までずっと目指してきた国際大会で、目標だったはずの受賞を勝ち取ったのに、全くと言って良いほどに感情が乱れなかった。相手には心配され、自分でも訳が分からなかった。

担当した会議は第一総会、議題は“Cyber Terrorism”。渡米数カ月前には会議が割り当てられ、リサーチを始めた。比較的新しい分野の議題ゆえに、使用する資料のほとんどが英語だったので、リサーチは難航した。それでも、何とか満足いく程度に政策を仕上げることができ、渡米当日を迎えた。

初めの3日間は、国連クロアチア共和国政府代表部、国連平和維持活動局 中満泉 中東・アジア部長の事務所、国連日本政府代表部を訪問し、世界の前線で活躍する方々のお話を伺った。また、現地校の高校生との交流も楽しんだ。そして、開会式が開かれ、いよいよ会議当日を迎えた。

—会議について

先に、僕が会議で賞を取るためにプラスになると思うことを挙げておく。

- ① リサーチ
- ② 小道具
- ③ 議論の違いの理解
- ④ シンプルな政策の伝え方
- ⑤ 強いメンタル
- ⑥ 諦めない気持ち
- ⑦ 運

これらを、会議の流れに沿いながら、説明していこうと思う。

—会議1日目

会議は、それぞれの政策を発表する公式討議から幕を開けた。僕が最初に思ったことは、日本人のリサーチが世界一だという前評判はあまり間違っていなかったということである。だから、①については、全日本高校模擬国連大会と同じ意気込みで用意しておけば、全く問題は

Global Classrooms

ない。ただし、英語力の不足をリサーチ量でカバーできたり、リサーチ量が自信になったりするのも確かである。やはりリサーチは出来る限り完璧にこなしておきたい。

次に、非公式会議に入り、元々決めてあったEUのメンバーを集めようとした。このとき役に立ったのが、ホワイトボードであった。持っているだけで目立ち、議長にアピールできた。さらに、議論を整理し、議論の中心に立つことが出来た。また、相方が持ってきた小型印刷機のおかげで、昼休み明けには議論を踏まえた仮の決議案(DR)をメンバーに配ることが出来た。これらが②である。

議論していく中で僕が感じたことは、議論の目的が、全国大会とは大きく違うということだった。全日本大会では、よりよい案、より妥当な解決案を目指して議論していたが、国際大会では、各々が議論を楽しむために議論しているのである。何かを思いつけばすぐに提案するし、盛り上がる話題があれば、ずっとその話題を議論する。だから、議論が様々な方向に飛んでまとまりにくいのが、新しい提案が出てきやすい。この違いの理解が③である。理解した上で、どう対応するかが問われるだろう。

ちなみに、僕らの政策は、案の頭文字を取って「3D計画」として発表していたのだが、これが功を奏した。政策に覚えやすい題名を付けたことで、自分たちの案だけでなく、クロアチアとして覚えてもらうことが出来た。これが④である。どんなに妥当な政策でも、分かりやすくしなければ伝えることは難しい。その中身も、AだからBという、シンプルな因果関係になっていれば、尚更伝わりやすいだろう。

こうして、1日目はある程度目立ち、自分たちでも満足して終えることができた。しかし、本当の試練はここからだった。

一会議2日目

1日目のスピーカー募集で、たまたま2日目の会議の1番初めのスピーチをするチャンスを得ていた。そこで、1日目が終わった後に、議場を掴むためのスピーチを作っていた。これを読めば拍手が起こる自信はあったので、出番が来るのを楽しみにしていた。しかし、現実はその上手くは行かなかった。通常各国のスピーチから始まる会議が、議長裁量によって、解決案

の説明しか受け付けなくなってしまったのだ。ここで黙り込んでしまったのが、自分たちの反省点である。公式会議の議題から逸れてでもスピーチをする臨機応変さや、非公式でマイクを掴んで大声でスピーチをするくらいの勇気があった方が良かったのかもしれない。そういう反省を込めて、⑤を書いた。

そこからが、僕らにとって辛い時間の始まりだった。解決案の説明が行われていく中で、発言する機会を得ることが出来ず、午前中が終わった。昼休み明けには、とにかく発言すると決意し会議に臨んだものの、公式討議も非着席討議も行われないうまま、2時間が過ぎ、ついに会議を終る動議が発表された。このままでは終わることが出来ないと思い、その動議に反対するスピーカーとして、札を挙げた。結局、1分半で想定していたスピーチを、30秒で読まなければならない、議場を掴むことは出来なかった。最後まで諦めずに発言にこじつけたのは良かったが、全力を尽くせたとは言い難い。自分の今後の課題も込めて、⑥である。決して折れない気持ちが大切だと思う。

結局僕らの作った解決案は否決され、受賞する望みはないと思っていた。しかし、母国語ではない英語で議論を交わせたという充実感には確かに自分の中にあった。そして、受賞者の発表である。上でも述べた通り、僕らは優秀賞をいただく事が出来た。客観的な評価が出来ない模擬国連で、僕らの行動のどこが評価されたのかは分からないが、評価してくれた人との巡り合わせも含めて、⑦の運が最後の要素だと思った。

これで会議の流れと自分なりの考察を終え、最初に話を戻そうと思う。受賞したときに喜びは沸いてこなかった。後で考えてみると、受賞の前に僕の目標は達成出来ていたのかもしれない。僕の中で模擬国連を通して達成したかった目標は二つあった。それは、「楽しむこと」と「成長すること」。1週間の間、日本を代表する11人の派遣生と3人の大学生と過ごし、世界中の高校生と関わり、意見を交わしあった。とても刺激的で、自分なりに目指したいところも少し見えた気がした。その過程で、僕の二つの目標は達成できていたのかもしれない。

今のところ、僕がこの経験を通して得たと思

Global Classrooms

うものは全て述べてきた。しかし、これからの人生で、この経験やそれを通して出会った仲間たちが、今気付いている以上に自分にとってかけがえのないものになると確信している。また、この事業を通して、また一つ知らなかった世界を垣間見たことを、自分の成長の糧にしていきたい。これからもこの模擬国連という素晴らしい活動が続き、より多くの高校生が自分の世界の一步外の世界に手を伸ばす手助けになることを心から願っている。

最後になりましたが、この事業に関わってくださった全ての方々、応援してくださった全ての方々にお礼を申し上げます。グローバル・クラスルーム日本委員会の皆さま、ユネスコ・アジア文化センターの皆様、協力して下さった様々な団体の皆様、共に過ごした11人の派遣生、現地で出会った高校生、両親、先生、友達、そして相方の佐藤。もし誰か1人でも欠けていれば、このように最高の経験をさせていただく事は出来なかったと思います。本当にありがとうございました。



支援協力団体一覧

本事業の実施にあたり多くの方々から温かいご支援を賜りました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。(敬称略)

【後援】

外務省 経済産業省 文部科学省 公益財団法人日本国際連合協会 国際連合広報センター

【協賛】

メリルリンチ日本証券株式会社 株式会社公文教育研究会 TOEFL Junior (GC&T)
 三菱商事株式会社 株式会社新日本科学 株式会社JTB トヨタ自動車株式会社
 一般財団法人凸版印刷三幸会 株式会社ニチレイ 株式会社講談社 三井物産株式会社
 株式会社ナガセ東進ハイスクール みずほコーポレート銀行 学校法人駿河台学園駿台予備学校
 学校法人河合塾 三菱東京UFJ銀行 三井住友銀行 株式会社エヌエフ回路設計ブロック
 キッコーマン株式会社 伊藤忠商事 学校法人高宮学園代々木ゼミナール
 三井住友海上火災保険株式会社 損保ジャパンちきゅうくらぶ 丸紅株式会社
 日本光電工業株式会社 吉田製薬株式会社 株式会社ローソン イオン株式会社

【協力】

日本航空株式会社 読売新聞 日本経済新聞社 株式会社リクルート 理想科学工業株式会社

【Special Thanks】

国連クロアチア共和国政府代表部 (Permanent Mission of Republic of Croatia for the United Nations)

(順不同)





公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、メリルリンチ日本証券株式会社から引継ぎ、高校模擬国連事業の共催団体として 2012 年度国際大会派遣から支援することになりました。グローバル・クラスルーム日本委員会 (JCGC) の「次世代の国際人/グローバルな人材を育成する」という趣旨にご理解・ご賛同をいただき、ご協賛・ご協力をいただいた企業・団体様に改めて深く御礼申し上げます。

昨年 11 月に開催された第 6 回全日本高校模擬国連大会で最優秀賞・優秀賞・審査員特別賞に輝き、2013 グローバル・クラスルーム高校模擬国連国際大会日本代表に選出された皆さんの国際大会における堂々とした英語での主張、交渉能力は日本代表として立派なものでした。皆さんの熱意も素晴らしく、また、東ヨーロッパのクローチア担当ということでリサーチや準備も大変だったということは想像に難くありませんが、その中であって 2 校が優秀賞 (Honorable Mention) に輝いたことは私どもの大きな喜びでもあります。ニューヨークで出会った多くの方々、JCGC 関係者、今まで全日本大会に出場された皆さん、国際大会に出場した OB/OG の皆様からも沢山のお祝いのメッセージをいただいております。

また、今回の大会では今後の日本代表の課題が明らかになったことも大きな成果であります。日本代表は伝統的に事前研究については世界のどのチームよりも抜きん出ており、豊富な知識に裏付けされて担当国の国益と国際益のバランスを取りながら提案文を作成し、会議ではそのように主張してきました。今年度の日本代表もそうした成功体験に倣って何か月にも渡り準備をしてきたと思いますし、現地宿泊ホテルでもスピーチ原稿の推敲を夜遅くまで、また朝早くから練習していたと思いますが、そういった努力が会議中にもっと生かされても良かったのではないかと思います。皆さんが触れた国際大会の雰囲気やご自身の緊張感是非後輩たちにお伝えしてください。

今回の国際大会で得た経験や努力が、皆さんの将来のキャリア創造に役立ち、次世代の国際人/グローバルな人材に成るための一助になるなら、ACCU としてもこれ以上の喜びはありません。

せん。国連平和維持活動局 中満泉 中東・アジア部長が皆さんにお話しておられたように、「弱い人々の意見を聞けるリーダー」になってください。

最後になりますが、今回の国際大会派遣にご尽力いただいた関係各位の皆様には心より御礼申し上げます。今後ますます派遣事業が発展して行きますよう、ACCU としても精一杯努めてまいります。今後ともご支援・ご協力何卒宜しくお願いいたします。

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU : Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO) について

ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、ユネスコ (UNESCO、国際連合教育科学文化機関) から「アジア太平洋地域での文化の相互交流を促進する中核的センター」の設置を打診されたことを契機に、1971 年に日本政府と出版界を中心とした民間の協力によって設立されました。設立以来、ユネスコのうたう「平和は、人類の英知と精神的な連帯のうえに築かれるものである」という精神のもとに、日本を拠点にアジア太平洋地区諸国の教育と文化の分野でユネスコや各国関係団体と協力して、人材の育成と相互交流を促進する事業を行なっています。

2011 年 11 月からは「公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター」として、これまで以上に関係機関と連携して地域の現状と社会の要望に即した事業を展開しています。

Global Classrooms

会計報告

本派遣事業に要する費用は、賛同して頂いた多数の企業の皆様のご寄付によって賄われています。本当に多くの方に支えられていることにあらためまして深く感謝いたします。

(金額表示単位：万円)

【支出】

会場費	10
招待者交通費	260
招待者宿泊費	100
広告費・印刷費	30
<hr/>	
合計	400

【収入】

合計	400
----	-----

* 30社からご協賛いただきました

Global Classrooms

グローバル・クラスルーム 日本委員会(2013年6月現在)

(敬称略、順不同)

【アドバイザー・ボード】

明石 康

(元国連事務次長／公益財団法人国際文化
会館理事長)

小林 いずみ

(世界銀行グループ 多数国間投資保証機関
(MIGA)長官)

【評議会】

星野 俊也(議長)

(日本模擬国連創設者・OB／大阪大学 大学
院公共政策研究科長／元国連日本政府代表
部公使参事官)

紀谷 昌彦

(日本模擬国連 OB／在ベルギー日本国大使
館公使)

中満 泉

(日本模擬国連 OG／国際連合平和維持活動
局 中東・アジア部長)

島津 正数

(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センタ
ー 業務執行理事 事務局長)

康 武司

(公益財団法人ユネスコ・アジア文化センタ
ー 人物交流課高校模擬国連事業担当)

柿岡 俊一

(埼玉県立浦和第一女子高等学校 教諭)

竹林 和彦

(渋谷教育学園渋谷中学高等学校 教諭)

米山 宏

(公文国際学園中等部・高等部 教諭)

柴原 一貴

(グローバル・クラスルーム日本委員会 理
事長／慶應義塾大学法学部3年)

青柳 拓真

(グローバル・クラスルーム日本委員会 理
事／東京大学教養学部3年)

衛藤 菜生

(2010年国際大会派遣生／東京医科大学医
学部3年)

笹原 怜奈

(2011年国際大会派遣生／早稲田大学政治経
済学部2年)

【理事会】

柴原 一貴(理事長)

(慶應義塾大学法学部3年)

青柳 拓真(研究担当)

(東京大学教養学部3年)

立花 裕太郎

(慶應義塾大学法学部2年)

松野 雅人

(東京大学教養学部2年)

古畑 拓真

(明治大学法学部3年)

渡部 智

(東京大学法学部4年／2012年度研究担当)

Global Classrooms

おわりに

国連とは国際社会の縮図です。それは、世界193の加盟国による最も普遍的な議論の場であり、その議論は人類全体の行く末を左右しかねないものなのです。国連での会議外交では、各国の国益が激しく対立する場面が多々ありますが、外交とは単なる国益のぶつかり合いではありません。各国は自らの国益を見極めながらも、同時に国際社会全体の共通利益を探り、一国では解決不能の諸問題に共同で対処していく、複雑でかつ創造的・建設的なプロセスが繰り返されなければなりません。こうしたプロセスで必要な物は、相手を言い負かすためのロジックではなく、議題となる問題への深い知識や洞察、高度の判断力・交渉力そしてコミュニケーション能力などです。模擬国連は、知識とスキルをもとに、立場や考えを異にする人々の間で、積極的な国際協力を実現するための合意形成を進めるエクササイズとして、とても有益なものです。

今回日本から参加した若い「大使」たちは、ニューヨークにおいて本物の国連を間近に実感しながら、教科書では学ぶことのできない多くのことを体験し、これからの学びと研鑽の糧を得て帰国しました。

私たちの暮らす世界は、恐ろしいほどのスピードで変革しています。既存の考え方にとらわれず、創造的に、ダイナミックに課題に取り組み、世界の人々と協力し、またリーダーシップを発揮できる人材を日本からも数多く出す必要があります。私たちは、ニューヨークでの模擬国連会議に高校生を派遣する事業を、そのための小さな、しかし重要な活動のひとつと位置づけています。参加高校生が持ち帰る経験は、国連という限られた場のみならず、広く外交、ビジネス、研究などの場で有益なものであると確信しています。

米国国連協会からのご厚意と数多くの支援協力団体のご支援により、少数の有志によるグローバル・クラスルーム日本委員会が始めた高校生の日本代表団派遣支援事業は今回で7回目となりました。今回も代表団にご参加くださった各校のトップを含む教職員各位、保護者の皆様、そして生徒さんたちご自身がそれぞれ責任ある姿勢と冷静なご判断を胸に行動し、何ら問

題なく派遣事業を終えられ、さらに優秀な業績を残してこられたことを私たち評議員は、心からの感謝と感激の思いで受け止めました。ありがとうございました。

また、毎回の派遣事業には大学生の全国組織である日本模擬国連による運営が不可欠ですが、柴原理事長以下、代表団のためとなるよう誠実かつ効果的に準備に取り組んでくださったことに改めて厚く御礼を申し上げます。さらに、本事業への支援をお続けくださっている協賛/後援諸団体には感謝の言葉もございません。私たちとしては、多くの皆様のご支援とご期待を励みとし、グローバル・クラスルーム事業の更なる発展に一層の努力をしていく所存です。どうぞ今後ともご指導・ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

グローバル・クラスルーム日本委員会
評議会 議長 星野 俊也

Global Classrooms

参考

【関連リンク】

グローバル・クラス
ルーム日本委員会
／Japan Committee for
Global Classrooms

<http://jmun.org/gc/>

公益財団法人ユネ
スコ・アジア文化セ
ンター

<http://www.accu.or.jp/>

日本模擬国連／
Japan Model United
Nations

<http://jmun.org/>

米国国連協会／
United Nations
Association of the
United States of
America

<http://www.unausa.org/>

【関連報道】

朝日新聞 『模擬国連 英語で討論』 5/16

日本経済新聞 『高校生「模擬国連」で日本
の2校が入賞』 5/19

共同通信社 『国際模擬国連、日本の2校入
賞 高校生「外交官」が論戦』 5/19

北海道新聞、東奥日報、山形新聞、福島民報、
下野新聞、茨城新聞、千葉日報、山梨日日新
聞、静岡新聞、北國新聞、福井新聞、神戸新
聞、山陽新聞、中國新聞、大阪日日新聞、山
陰中央新報、四国新聞、徳島新聞、高知新聞、
大分合同新聞、宮崎日日新聞、長崎新聞、佐
賀新聞、リセマム等が上記記事をウェブ・紙
面等で報道。

【お問い合わせ】

gc@jmun.org



Global Classrooms

Memo

Global Classrooms

Memo



企画・編集 Japan Committee for Global Classrooms

監修・発行 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

発行年月日：平成 25 年 6 月 14 日